

ものことゆめの交換

宝飾展



会期：2018年1月10日(水)～14日(日) 10:00～17:30(最終日は15:00まで)

会場：埼玉県立近代美術館 地階・般展示室1

主催：SMF、埼玉県立近代美術館

観覧料：無料

MONO KOTO YUME
TAKARABUNE-TEN 2018
@MOMAS

シンポジウム&ギャラリートーク：1月13日(土) 13:00～17:00 @一般展示室1
出展者交流会：1月13日(土) 18:00～ @Bon Voyage(北浦和駅東口、会費制)

SMFは身近な場所でアートを楽しむ支援し
再創造するプラットフォームをめざしています。

<http://www.artplatform.jp>



ご あ い さ つ

SMF（エスエムエフ：サイタマ・ミューズ・フォーラム）は、埼玉県立近代美術館を主要拠点に、ジャンルにとらわれない自由な視点からさまざまなアートプログラムを企画し、 アートをめぐって多くの人がつながってゆくためのプラットフォームをめざして、2008年から活動してきました。

SMFは、県内で様々なアート活動を行う人々の出会いや交流を大切にし、プロ、アマを問わずアートを愛し、ユニークで意欲的な表現を展開する人々の交流・攪拌から、新たな創造のエネルギーが広がっていくことをめざしてきました。こうした活動は、「ラウンドテーブル」、「さんなすび展」、「アートのまつり」さらに「宝船展」と、かたちを変えながら10年にわたって継続されています。

アートの表現者だけではなく、企画する側、さらには楽しむ側など様々な立場の個人や団体が一堂に会し、こんな人がいるんだとおどろいたり、情報やスキルを交換したりして、それぞれの活動を次へ進めるための場になってきました。それが、インターネットというより開かれた場で集う「アート長屋」や、ネット空間と美術館の空間を股にかけた「宝船展」へと繋がり、さらに、よりアクティブな枠組みへと進化しようとしています。

今回は告知から開催まで1カ月足らずという短い時間にもかかわらず、初出品のフレッシュな方々も多数含めて、前回の倍近い32組38点の意欲的な出品作品が会場に並びました。会期中には各種のパフォーマンスも計画されています。さまざまな夢や思念にかたちを与えようと格闘したこれらの意欲的な表現の世界は、混迷を深めるかに見える現在を、個の視点からひっくり返した世界を実現しているのかも知れません。新春を寿ぎながら、ごゆっくりとお楽しみください。

宝船展2018@MOMAS 出展作品リスト (敬称略、50音順)

No.	作家名	タイトル	制作年
1	浅見 俊哉	現在の青図	2017～
2	石上 城行	記憶の景色 -大きな樹-	未定
3	内野 知樹	ほころぶ	20XX
4	加藤こどもの造形教室(25人合作)	名前立国	2016
5	KAPL	「本音本」出版プロジェクト	2018-19
6	木村 昭司	風景 Collection	2016-18
7	佐藤 悦子	点在する場所	*
8	佐藤 仁美	SENSE OF FIELD (東京/イタリア・ポローニャ)	2015
9	佐藤 仁美	LIGHT OF TEMPLE (東京)	2017
10	清水 和乃	浮島	*
11	田中 清隆	方法装置	数年前～2017～
12	谷川 潤	たにじゅん日記～the diary of TANIJUN～	2019年3月には第一弾発行
13	DamaDamTal	クウのキオク	2018～
14	チームパワーワード	Circlight Communication	2017-18
15	田 幸樹枝	ガリバーの国へ迷い込んだ君へ	2018
16	とうゆう	だい	*
17	とうゆう	鳥が会う	*
18	戸口 未貴	(タイトル未定) 2018年の挑戦と希望のストーリー	2018
19	中村 元	さぎ山の現場＝中村元の記録	*
20	中村 隆	今年の干支は、きたうらワン!	2018～
21	西尾 路子	solid@plane://22 描・猫/2017	2017
22	西尾 路子	solid@plane://23 犬・犬/miniature model/2018	2018
23	根岸 和弘	脱フレーム(Let's do painting)	未定
24	根本 賢	境界面	2018
25	根本 賢	デン蛇ラスコーン	2018
26	藤井 彩加	Just Married	2020
27	藤井 香	沈む船	宝くじが当たったら、その年
28	銚井 喬	Windscape from SKY	2018-19
29	星野 佑太	個:うつわに宿るUnique	2017
30	三浦 清史	The Wall of 千鳥格子と'き'がわりの假具	*
31	三木 祥子	Indistinguishable Boat, 2018	2018
32	三友 周太	トレインミュージアム(100色100語)	2018～開始
33	みょうか	夢見る樹	2018
34	みょうか	星に願いを	2019年1月までには
35	矢花 俊樹	84 children	2018
36	矢花 俊樹	旅に誘う虫たち	2010～
37	社会芸術/ユニット・ウルス	“野良の藝術” 里山の現場2017 活動報告展	2017.10.28～11.12
38	横田 龍堂	DIGITALxANALOG	2018

宝船展会期中のパフォーマンス、ワークショップ、公開ミーティング等予定 (変更となる場合があります)

	日時	イベント名(仮題)	内容
1	11日(木)～14日(日)時間未定	DamaDamTal	会場作品とのランダムセッション
2	13日(土)10:00～11:30	矢花俊樹 お顔をトレースワークショップ	参加型ワークショップ(約90分)
3	13日(土)11:30～12:30	横田龍堂 DIGITAL x ANALOG	書道パフォーマンス、観客参加可(約60分)
4	13日(土)12:30～12:45	DamaDamTal クウのキオク(浅見作品コラボ)	音楽、ダンスパフォーマンス(約15分)
5	13日(土)12:45～13:00	ユニットウルス/森の民PF(ウルス作品コラボ)	サウンドパフォーマンス(15分)
6	13日(土)13:00～16:00	アーティストによるギャラリートーク	会場内移動しながら実施)
7	13日(土)16:00～16:05	藤井香 沈む船(ソロのパート)	ダンスパフォーマンス
8	13日(土)16:15～17:15	シンポジウム(出展アーティストととの意見交換)	会場内でのラウンドテーブル・ミーティング
9	14日(日)12:30～12:45	DamaDamTal クウのキオク(浅見作品コラボ)	音楽、ダンスパフォーマンス(約15分)
10	14日(日)13:00～15:00	KAPL 「本音本」出版プロジェクト	会場ミーティング
11	14日(日)11:00～13:00間で随時	蒼浩人(飛び入り)ダンスパフォーマンス)	会場作品と絡んだダンスパフォーマンス



僕は建築の設計を仕事をしているので、ある「場所」における「表現」という問題を常に考えてしまう。自分の設計する建築の建つ場所が、新興住宅地なのか農村集落なのか、町屋的な敷地割をもっているのか角地なのか、南に開けているのか高密度な旗竿状の敷地なのか等。世界にひとつしかないその敷地の性格に向き合うことなしに、その建築はリアリティーを獲得できないと考えているのだ。そんな職業病をもっている関係上、建築だけでなくアート作品を見る時も、そのよってたつ場所、地域性とでも呼べるようなことに意識が向く。

だから、SMFで埼玉でアートに携わる人々が集う場「ラウンド・テーブル」を開催すると聞いた時に、彼らとの対話や表現に向かい合うなかで、埼玉の地域性とは何かという問いに対する答えを得られるのではないかという期待をもっていた。ところが、何年か「ラウンド・テーブル」を続けていても、答えは見えてこなかった。見えてこないどころか、

その問い自体が、あまり本質的なところに食い込むような問いではないのではないかと考えるようになってきた。森林公園でアートのイベントを企画すると聞くと、自分の知っている空間ということでは想像が付きやすいが、そこから先に踏み込めるものでもない。宮代町のたんぼでアートを作っているグループは、特に埼玉を意識しているわけではないし、見沼区で泥を使った絵画を試みる画家の使う泥は浅間山産と、地域の設定自体があいまいになっていく。もちろん地域性を全く意識していない作家もいる。だから、当たり前のことだが、作家や鑑賞者の数だけ、地域との向き合い方は多様だというのが結論なのかもしれないし、埼玉県は大都市東京に隣接していることから生ずる性格を共有しているところ、に、落ち着いてしまうのかもしれない。

しかし、今回「宝船展」を見せて頂いて、埼玉の地域性という問題を狭い意味での「場所」の問題として脇に置いておいて、もうすこし広い意味での「場所」を考えるヒントが見え隠れしているのを感じた。

「建築」と「場所」との間に、外構、門・塀といったものがあるように、通常、アート作品（特に絵画）とまわりの空間との間に、額縁がある。その額縁が、「宝船展」の作品では全くといっていいほど欠落していることに気がついたのだ。

絵画は、額縁によって場所と切り離されて、周囲の空間から独立した表現を成立させ、演劇もプロセシウムによって、観客席とは別の演劇空間を確保した。額縁の介在によって表現の不可侵領域を確立させたアートだが、「宝船展」の作品群は、するりと額縁を脱ぎ捨てた。いや、始めから額縁を必要としていない、さらに言うと、額縁その他、何かの枠の中に納まることとは逆方向のベクトルで「もの」がつくられているのではないか。

会場の埼玉県立近代美術館は、県展の時に多くの作品でいっぱいになる。その作品はりっぱな額縁に入り、県の要職につかれた方々の名を冠した賞が与えられれば、さらにりっぱな作品となる。県展に出ること自体がステータスで、美術館自体も大きな額縁なのかもしれない。ところが、同じ美術館の展示室のはずなのに、「宝船展」を支配していたのは権威のピラミッドという枠組みとは無縁の、自由な空気だった。

そこでは、ある人の作品を見ようとすると、他の人の作品も同時に視界に入ってくる。別の作品から距離をおいて見ようとすると、床に置かれた作品を踏んでしまいそうになる。作品も空間も入り混じって知覚されるし、作品もそれを拒んでいない。

ここに、なにか独特の場所性を感じたような気がした。そのことをうまく説明はできないのだが、表現が場所へと滲みだす、あるいは、作品性が環境と溶け合うとも言えるような内容かもしれない。

SMFで問い続けてきた生活とアートとの問題にも、このあたりのことが関係してくるのではと思えてくる。場所と表現をめぐる旅は、まだまだ続くようだ。

No.1 / 浅見俊哉 Shunya.Asami / 「現在の青図 - 2017」 Blue Print of NOW -2017



影の部分に合わせて実物のモチーフを配置する展示構成を初めて行った。Cyanotype 2017 年作 450cm×235cm (中央作品)



この『現在の青図 -2017』は 2017 年に群馬県中之条町で開催された中之条ビエンナーレで制作・発表された作品である。サイアノタイプという写真の古典技法を用いて、モチーフを感光布の上に配置し太陽光で焼き付けて制作する。モチーフは、5500 年前に中之条町の縄文遺跡で発掘された土器をはじめ、埴輪や土偶、養蚕で盛んだった時に使われていた道具を中之条町歴史と民俗の博物館「ミュゼ」の協力の下お借りした。さらに、広島は今も生き続けている被爆樹木の葉、東日本大震災で被害を受けた宮城県名取市閑上地区の遺失物を用いて画面を構成した。それらのつくる影を一つの感光面に焼き付け、「現在」について考えることができる青図を焼きたいと考え制作を行った。

中之条ビエンナーレの後も、作品は展示の形態を変えながら旅を続けている。

同じ年の 12 月に東京の木場の「Earth+Gallery」で展示され、ワークショップやパフォーマンスプログラムが行われた。そして 3 回目の展示となる今回の「宝船展 2018」埼玉県立近代美術館での展示を通して、多くの方と作品を通じた交流をすることができた。作品を見て、広島の被爆樹木や閑上することに興味を持ってくれる人が多数いた。パフォーマンスを会期中 2 日間行ってくれた DamaDamTal の方とは作品を通して、今後にも繋がる密な交流ができた。

No.1 / 浅見俊哉 Shunya.Asami / 「現在の青図 - 2017」 Blue Print of NOW -2017

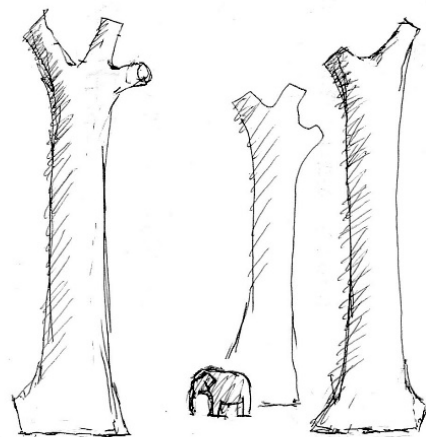


「DamaDam Tal」によるパフォーマンスの様子 2018 1/13・14 の2日間開催した。

出品番号: NO. 2 / 作者: 石上城行 / タイトル: 「記憶の景色 ー林の中の象ー」

今回、宝船展 2018 に出品した作品は、昨年宝船展に展示したスケッチ「記憶の景色ー林の中の象ー」をもとにエスキースとして具体化したものである。

具体的な制作工程は、まず塑像用粘土で原型を作り、石膏取りの作業をへて石膏像に置き換える。次に表面をヤスリで整えることでカタチの精度を出して完成させている。作品は、抽象化した二つの木の間に象がゆっくりと歩む姿で構成されていて、何処かにあるようで何処にも無い景色が展開している。今回、展示した作品はあくまでもエスキースとして提示していて、実際は実物大のインド象のサイズをイメージしている。最終的にはブロンズ製の彫刻として、どこかの広場に設置したいと考えている。



タイトルの「林の中の象」とは原始仏教のダンマパダの詩篇にある言葉で、出家者が修行に臨む際の覚悟を説いた言葉の一部である。本来の意味としては、厳しい決意を促す言葉だが、私としては少しやさしい感じでまとめることで、ニュアンスの間口を広げている。

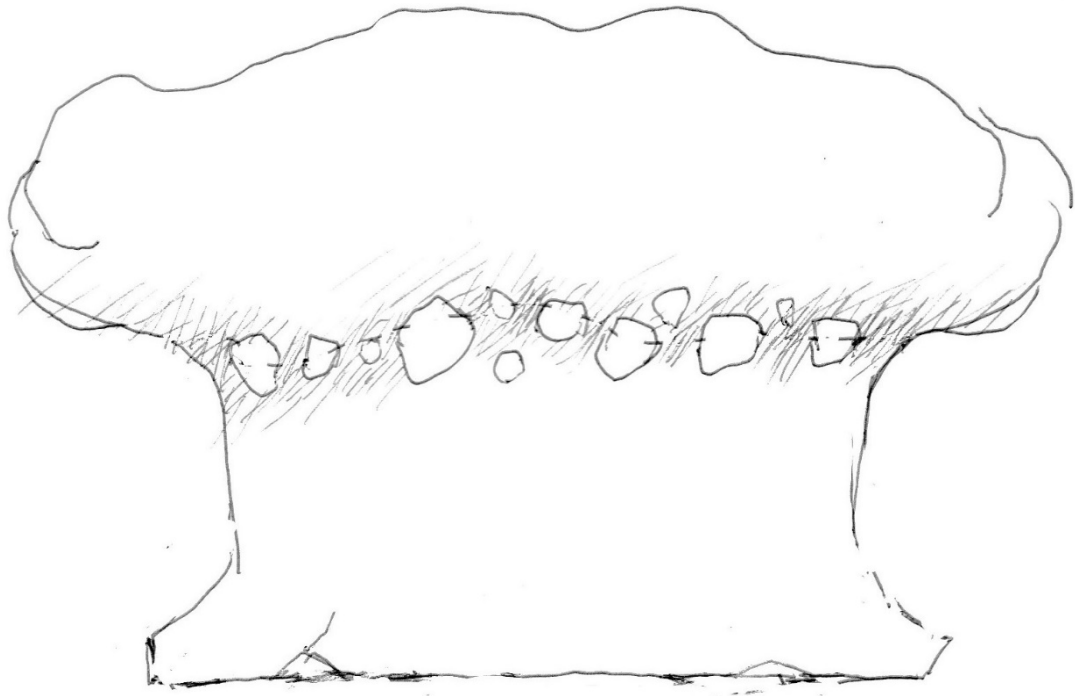


実際、今回の宝船展に参加したパフォーマーの方から私の作品の中でパフォーマンスしてみたいとの申し出があったと聞く。非常にうれしかざりであり、将来そのような企画が実現することを切に願う次第である。

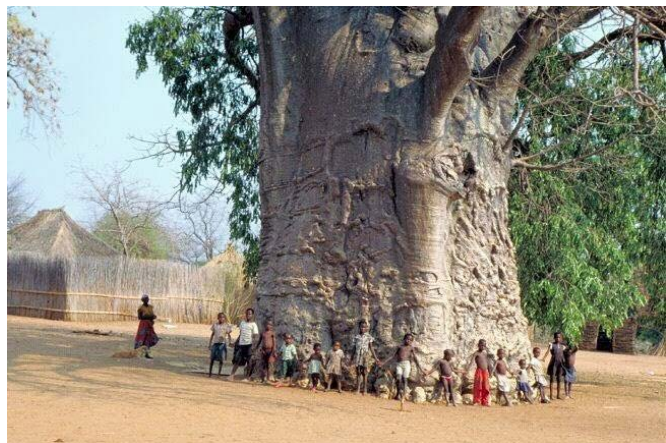
最近、ここ数年の自身の作品を振り替えてみた。2006年に「記憶の容(カタチ)」というタイトルで家型の彫刻を作ったときから「記憶の景色」「記憶の庭」「記憶の旅」などというタイトルを付しながら様々なカタチを作品世界に出現させてきた。いずれも記憶をテーマとするところが共通して

いる。

私にとって記憶とは、常に忘却と更新をくりかえす人の心の営みであり、最も人間らしい特質の一つと考えている。これは、この世の理（ことわり）を、全て相互の関係に起因するものと考え、常に変化し、ひと時も留まることは無い、と規定した東洋哲学の思想を最もよく体現した事象ではないかと感じている。



今後は今年の宝船展のエントリーシートで示したように「樹」をテーマとした作品を夢想している。樹のもとに集う人々へ、ひと時の憩いをもたらすとともに、それぞれが自分自身と向き合う「時（とき）」を創出する「場」の醸成に寄与できるような、大らかな彫刻作品を創りたいと考えている。



画像 樹齢 2000 年の幸福の木：南アフリカ

No. 3 内野知樹 「ほころぶ」



展示を終えて

今回の展示の作品の仕上げとしてリサイクルショップで買い集めた数百円の中古のフレーム、マットの代わりに和紙の再生紙を使用した。

それはそれで再生という意味を込められているので、一つの展示の仕方として納得している。

もっと大きな作品にできないか？

それが展示以前に課題としてあったのだけど、大きいだけがすべてではないということを学んだ。

このハガキサイズの作品でも伝えられないことはない。

他の展示者の作品で継ぎはぎのようにして大きな作品にしているものがあって、そういうやり方もあるかと学べたことも大きな収穫といえる。

この「ほころぶ」という作品がどう変化するか、自分でも楽しみだ。

一つの写真作品シリーズとして「ほころぶ」というタイトルで制作してきた。

社会のほころびを写真で浮かびあがらせるということを目的にしている。

非常に写真的なアプローチでテーマに沿う写真を時には泊りがけで出かけ、ひたすら歩き回り対象を探し続けた。

ゴミ、廃車、廃墟、漂着物、忘れ去られたモノ、明らかに異質なモノ、死骸。

数年前に四谷の写真ギャラリーで同タイトルで個展を開いた。

30点ほど写真をセレクトし、ファインプリント、フレームにマットという定番の額装をし横一列、ギャラリーの壁面に並べた。あまりにもありきたりな展示だけれど、それはそれで間違っていたとは思っていない。

写真とはそういうものだろう。

けれど、その先に何があるかというところ少し疑念を抱いている。

新しい被写体をまた探し回って、枚数が集まったら展示をすればいいのか。

それでは面白くない。

並行していくつかの作品を制作していて、新しいほころぶの陰影が見えてきた。

ほころびを浮き上がらせたとして、それで終わらせるわけにはいかない。

私自身もこの社会の一員であるし、再生を想起させるような作品にこそ伝えたい事がこめられる。

別の作品で始めたことは和紙を使用すること。

ストレートに写真をプリントすることが基本なのだけど、和紙の切れ端を集めてもう一度一枚の紙にすることを学んだ。

直接的すぎるけれど、再生した紙を使用することでポジティブなメッセージに変えることができるかもしれない。

和紙ではなく日常の生活で発生する沢山の紙を使用することにした。

これで大きな紙を作り、そこにプリントできたらかなりのインパクトを出せる。

そう思いつつ今はハガキサイズしか制作できていないのでどのような形にするかこれからの課題だ。

SMF 宝 船 展 2018 “夢のタネを語る、表す、つなぐ”

Name 作家名： 『加藤こどもの造形教室』（25人合作） 指導 加藤典子

Title 作品タイトル： 出品リスト No.4 「名前立国」

Year of realization 実現年： 2016年 制作
(さいたまトリエンナーレ2016 『市民プロジェクト』 参加作品)

Description 作品についての記述：

「人の名前は人生へ託す夢」

私たちは自分の名前を自らつけることは出来ない。名前は、将来へ託す夢や願いが込められた、子どもへの最初の贈り物のようだ。

そうやって知らずにつけられた名前を、私たちは物心ついた頃によりやく意識し始める。

愛称で呼ばれるのもつかの間、やがて名前は答案用紙に記入するばかりの時期を経て、いつしか私たちは「自分の名前」なんかに、かまけていられないほどの現実社会に巻き込まれていく。

名前は単なる識別記号と化し、その意味を深くさぐるひまもなく、それぞれの人生をひた走ることになる。

よりやく立ち止まる気持ちが訪れた時、長く人生とともにあった「自分の名前」の意味に思い至る。託されたことは何だったのかを噛みしめてみる。すると…

図らずも、自分の名前につながるような生き方をして来たような気持ちになる。それは名前に支配されたという訳ではなく、託された夢と、込められた愛に自分なりに報いた生き方であった、と思いたいがため、の意味付けなのだろうか…。

そのような考えを踏まえつつ、造形教室のみんなでこの作品を制作した。小学1年生から6年生までの子どもたちが自分の名前の意味をきっかけとしてそれぞれがその時に持てる力で考えながら、造形表現で小さな国を作った。

これらを切頂二十面体(サッカーボールの形)の一つ一つの面に貼り付けて小さな惑星のように。タイトルは「名前立国」。

長い月日を子どもの造形表現とともにとぼとぼと歩みながら豊かな造形惑星を夢見るものとして、これは一つのモニュメントとも言えるのかも知れない。

「名前立国」

『加藤こどもの造形教室』(25人合作)



一村末羽



江連拓海



一村比呂



新村 陸



高橋美輝



山田福太郎



深井俊輔



山田桜一郎



安藤 權



吉野翔太



星野光太



古厩友翔



矢澤心美



猪俣空土



大園美奈



大谷悠斗



古川かえで



青柳佳伶



畠山知子



鈴木星美



伊月 奏



安彦眞里



千田凧花



吉木孝英



早野柚葉

ART PROJECT 一本音会議 HONNE MEETING

1st Session : 2017.1/14 13:00-15:00
@ 埼玉県立近代美術館 地下一階展示室



今、全国で芸術祭やアートプロジェクトが実践され、同時にそれに関わる多くの人たちがアートスペースを持ち、独自に展開している。一方で、こうしたアートプロジェクトの課題やアートスペースの運営の問題について、その体験を共有する場は少なく、課題等の解決は個々の現場に任せられ、その対応に現場は疲弊している側面もある。

「本音本」出版プロジェクトは、アーティストやプロジェクト参加者などの様々な立場の人の悩みや本音を紡ぎ、そこで得た経験知を共有することで、次の展開のきっかけにしたいと思って始めた企画である。進めた方は、「本音サイコロ」を振り、出た目のテーマに合わせて本音を語ってもらうシンプルなルールで、テーマは「たのしさ」、「くるしさ」、「せいこう」、「しっぱい」、「続けかた」、「やめかた」の6つとした。

宝船展 2018 の会期中には、第1回「本音会議」を開催し、前の活動の失敗体験から活動の続けかたを工夫している話や活動が続けることで繋がる出会いの楽しさの話、失敗が出来ない状況で続ける難しさの話等、多くの本音を聞くことができた。

来場者から「次回はうちでやったらどうか」との感想もいただき、次回への繋がりもできた。

「本音本」出版プロジェクトは始まったばかりで、これから各地に出掛けて本音を共有できればと思う。ぜひお声掛けいただければ幸いである。お問い合わせは、kapl@excite.co.jp まで



「本音会議」の様子



「本音サイコロ」の目の内容

「本音会議」の中で印象的だったのは、「せいこう」や「たのしさ」といった目の内容よりも、「しっぱい」や「やめかた」といった目の内容のトークの方が盛り上がったことである。

特に、面白かった意見として、『「やめかた」を考えることは、現在のアートプロジェクトや芸術祭の目的を考えていく事に繋がる。いつまでこのアートプロジェクトを行うのかを当事者がイメージできていないことが多い。終わり方の創造の重要度が今後求められるのではないか』という意見が出され、一同納得する場面があった。

出品番号：No.6

作者名：木村昭司

作品名：風景 Collection



《このプロジェクトについて》

2016年、風景スケッチを10数年振りに再開し、およそ1年半が経過しました。自宅から半径2kmくらいのエリアを歩きながら、気に入った風景や気になる風景をスケッチブックに描き留める日々です。

ほぼ毎日1～2枚ずつ描いていくうちに、私の「風景Collection」ができあがってきました。

画材は鉛筆、コンテ、サインペン、万年筆、そして筆ペンと徐々に増えてきましたが、基本はモノクロームです。

スケッチを始めてから、風景を「描く対象」として見るようになり、今まで見過ごしていた事物に目を止めるようになりました。畑に残されたトラクターの轍の線がとても美しく見えたり、1本道が遠くまで伸びる有様に心を惹かれたり、樹木の太い幹や瘤の盛り上がり生命力を感じたり。大げさに言えば、世界が今までとは違って見えてくる感覚。

風景Collectionがいつまで続くか、今後どのように展開していくかは分かりませんが、しばらく創作活動から遠ざかっていた私としては、これらのスケッチが新たな作品制作につながっていくことを、実はひそかに期待しているのです。

2018年に入り、キャンバスにアクリル絵の具で風景画を描き始めています。「風景Collection」の展開ということになりますが、単にスケッチを絵筆でなぞるのではなく、より抽象化した表現を目指しています。

しばらくは試行錯誤が続くことになると思います。

《展示風景》



「穴」をカットし、額装すれば「作品」らしくなったかもしれませんが、これらのスケッチ群は完成した作品ではなく、将来の作品の萌芽と考えていますので、このような展示形式としたものです。

F1～F4のスケッチ13点を4枚のパネルに入れて展示しました。

スケッチブックから切り離した「穴」をあえてそのまま残しましたが、それが気になった（＝ない方が良かった）という感想をいただきました。



「点在する場所」

佐藤 悦子

出品番号：7

私は‘そこに在る’ということを起点として、写真の成り立ちに関係の深い絵画的な視点から、私の目を通して生じる事物と、それを取り巻く環境との感覚的な関わりを求めるために制作をしている。

展示作品は、身の回りの日用品を型取りして石膏像を作り、それを部屋の風景として再構成して撮影したものである。

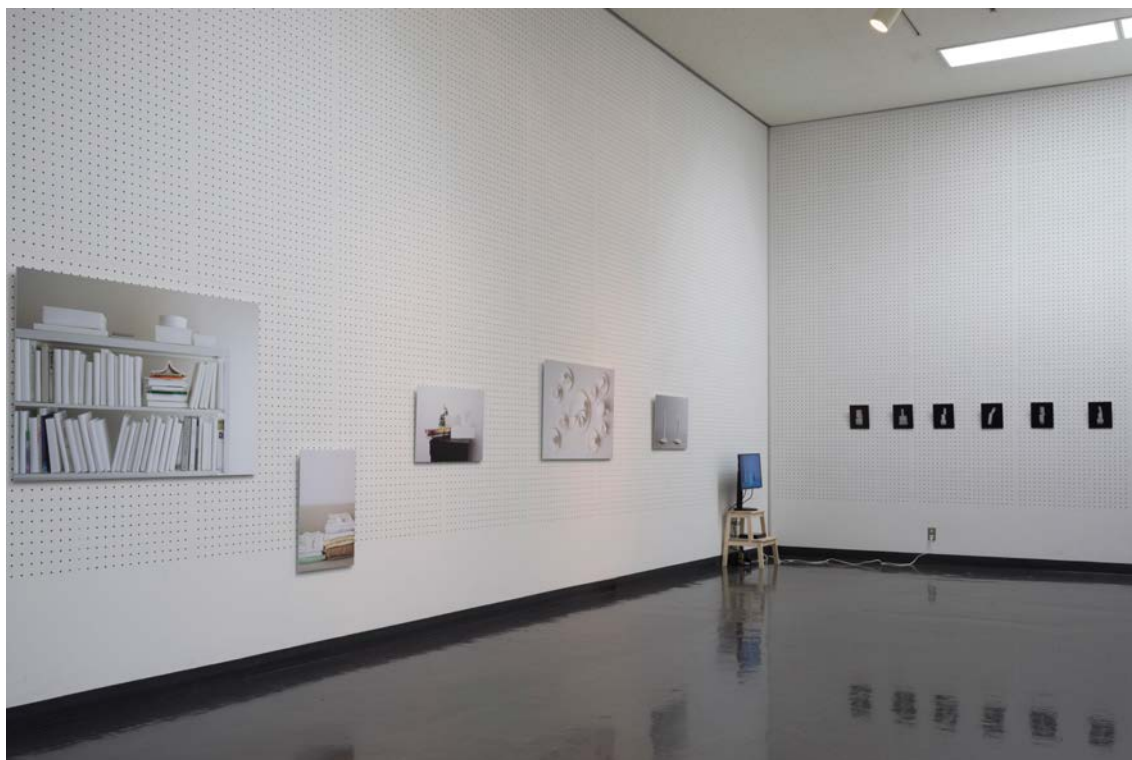
複製元の日用品は、主に古着や古本など他者を經由したものを集め、よって作品にはルーツの異なるいくつかの場所が混在している。

複製された石膏像は、元の日用品と姿かたちは同じであるが、その意味や機能は剥奪され、ただの塊となってしまっている。物としてそこに実在はしていても、何の役にも立たない、意味の無いものへと変容した姿は偽りの像であり、虚像である。

しかし、日用品に物の記憶が刻まれる様に、複製された石膏像にもその記憶は写し取られる。時間と共に美化され、またその逆も同様に、常に変容されがちな記憶は曖昧でもろく、モチーフである石膏像の壊れやすさに繋がる。

本作品では、日用品の個人的経験と部屋を俯瞰して見た時に生じる普遍性という相反する性質を共存させている。それぞれのイメージに個々の記憶と全体的感覚とを同時に取り込むことにより、その境界を揺るがし、‘在る’ことへの探求を深めたいと思う。

展示風景



《 SMF TAKARABUNE-EXHIBITION 2018 》 ENTRY SHEET

SMF 宝 船 展 2018 出 品 票 (夢のシート・アートプロジェクトの素) キャプション

Name 作家名： 佐藤仁美

Title of the project (work) プロジェクトまたは作品タイトル：

Sense of Field (東京/イタリア・ボローニャ)
Light of Temple (東京)

Year of realization 実現(予定)年： 2015年
2017年

Description プロジェクトまたは作品についての記述：

2015年 武蔵野美術大学の修了作品として制作。光に触れることを目指したインスタレーションで多くの方に体験していただきました。2016年には、世界的に影響のあるニュースサイトdesignboomの年間トップ入りしたことで注目を集め、2017年 イタリアボローニャで展示が始まりました。
THE WALL展 2018年5月6日まで開催されます。

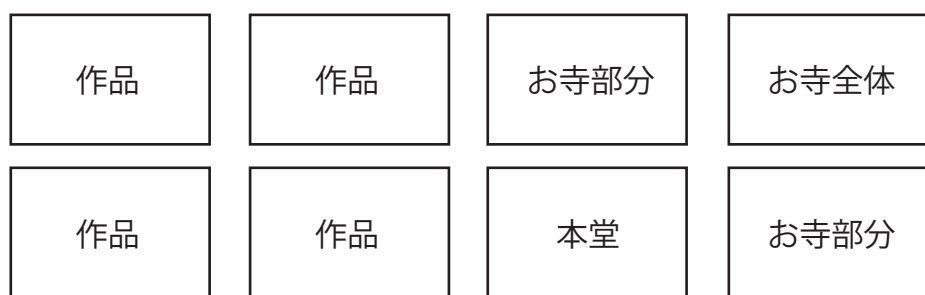
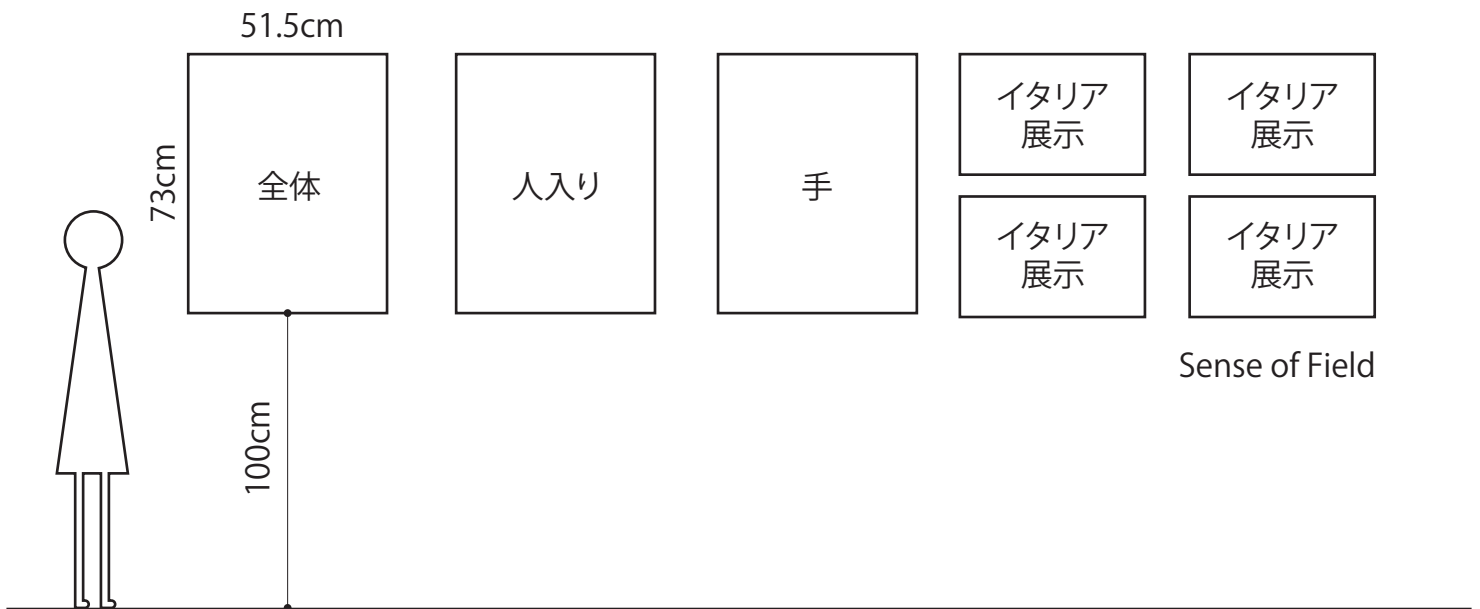
2017年 東京都住吉に建てられたお寺。
猿江妙寿寺別院の本堂には12mもの吹き抜けと天窓があります。
そのトップにあたる部分に半透明の布を覆い、手でゆがみを加えた反射板を天窓の周囲に設置しました。太陽の光が差し込むと反射板から布へ、光の存在をより感じる事ができる光が現れます。また時間によって季節によって光の表情が変わります。



SMF 宝 船 展 2018 出 品 票 (夢のシートアートプロジェクトの素) 作品イメージ

Reference images (drawings, photos,models) 参考図版 素描、写真、模型など：

A3~A1パネル



Light of Temple

《 SMF TAKARABUNE-EXHIBITION 2018 》 ENTRY SHEET

SMF 宝 船 展 2018 出 品 票 (夢のシート・アートプロジェクトの素) キャプション

Name 作家名 : 清水和乃

Title of the project (work) プロジェクトまたは作品タイトル :

NO. 10 「浮島」

Year of realization 実現(予定)年 : 実作品

Description プロジェクトまたは作品についての記述 :

「浮き島の船で古代にやってきた7つの幸せ」

古代に海から日本にもたらされた、稲作の原点を表現したいと思いました。

苔（特殊加工のモス）に覆われた浮き島に、黒米を中心にして、七福人になぞられた幸せを乗せてみました。

主な使用資材

1) 加工モス

トナカイが食する苔をドライにすると同時に科学薬品で処理して、ふわふわ感をだしています。どの国の税関も、問題なく通過できる資材です。

2) 黒米 川越にある古代米研究会の方が作られたお米です。

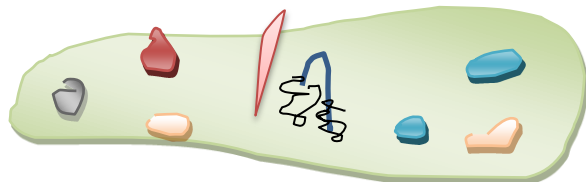
3) ワイヤいりロープ、

4) 毛糸

《 SMF TAKARABUNE-EXHIBITION 2018 》 ENTRY SHEET

SMF 宝船展 2018 出 品 票 (夢のシート・アートプロジェクトの素) 作品イメージ

Reference images (drawings, photos, models) 参考図版(素描、写真、模型など) :



NO,11
田中清隆
「方法装置」

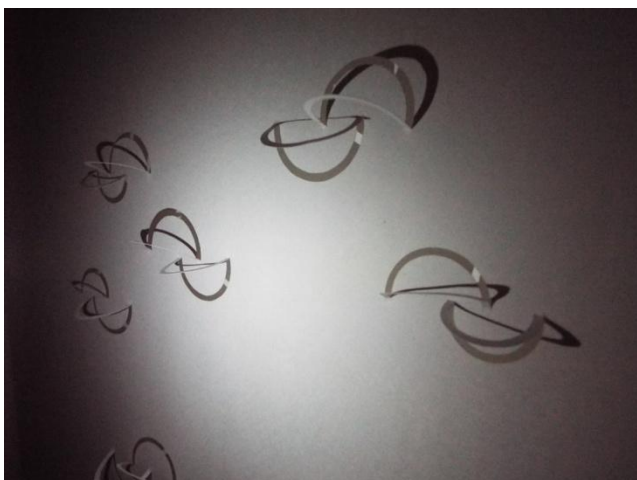
「ヒカリ」と「カゲ」の楽しみ方、遊影シリーズ

「あるもの」＝物体を「ヒカリ」で照らすと「カゲ」が現れます。

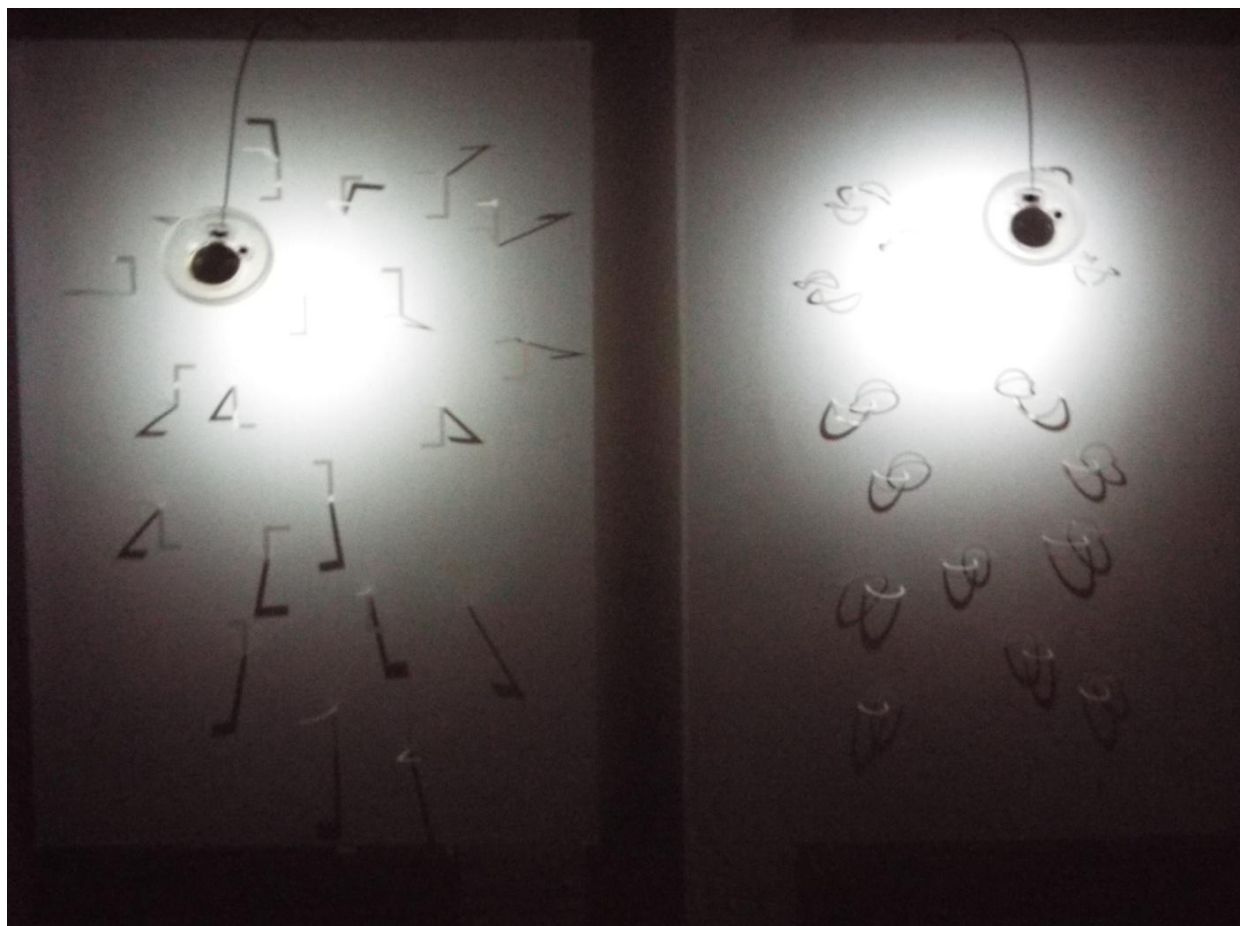
「ヒカリ」から物体の距離・方向・角度により、長く・短く、厚く・薄く、伸びて・縮んで「カゲ」の表情が変わります。単純な「モノ」から現れる「カゲ」を捜し、不思議な空間を見つける、作品群＝「遊影」シリーズを数年前から手掛けてきました。そこから少し変身した作品の展開です。

2013年から制作している「遊影」シリーズを通して身近にあるさまざまな素材を試して、採用しましたが、2017年の作品から「紙」と向き合い、その中から見えてくるものを探して、切り出し、「カタチ」を広げます。

切り出す「カタチ」は、向き合った「紙」の印象や気持ちに従って行きます。結果として「その時々」の「ヒカリ」と「カゲ」の「錯視的」な現象を感じられる「装置」の制作を目指しています。



NO,11
田中清隆
「方法装置」



宝船展 2018 出展記録

作品 No.12：たにじゅん日記～the diary of TANIJUN～

埼玉大学 教育学部 学部3年生 谷川 潤（たにかわ じゅん）



自分自身の作品について（↑が今回展示させていただいた作品の画像データです。）

今回の宝船展 2018 を振り返るに当たって、まずは、自身が出展してみてどういった経験ができたかをまとめてみたいと思います。こういった展覧会に個人として出展するのは初めてでしたが、思った以上に自分の個性・アイデンティティーというものについて考える時間を自分に設けることのできる機会になりました。個人として、どこに属しているかどうかはさほど問題とされず、“表現者・クリエイターの一人”として見られる・評価されるあの場所は、僕自身がこれからどうしたいのかを掘り起こしてくれる大きな要因になったように思えます。率直に感じたのは、「俺、やっぱり全然描いてないな」でした。自分がどんな方向性でいきたいのかとか、それを叶えるためにはああしなきゃだめだとかこうしないとできないとか考える前に、とにかくまず、「描かねば。もっと描きたい。」そう思いましたし、今も思っています。湧き上がるこの「描いてみたい・描きたい」をしっかりとある程度消化しき（るなんてことがないことは分かっているのですが）ってから、自分があらわしたものを見渡してみても遅くないのかなと感じています。とにかく、描きます。

他の出展者の方々とそれぞれの作品について

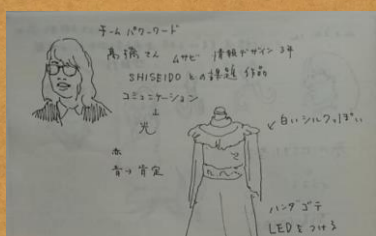
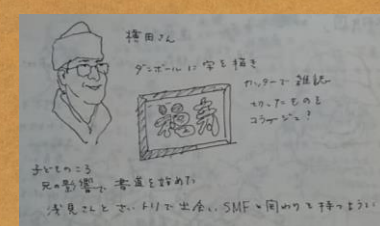
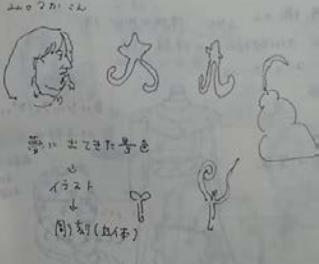
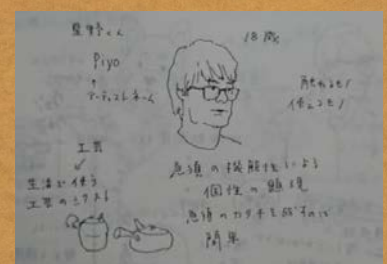
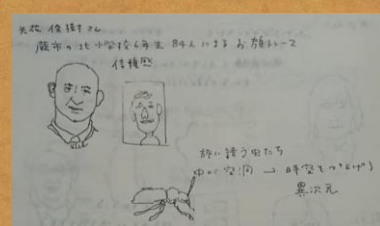
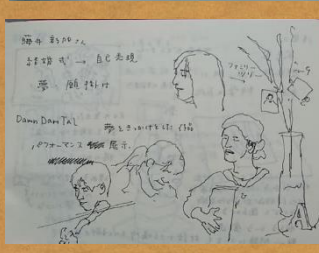
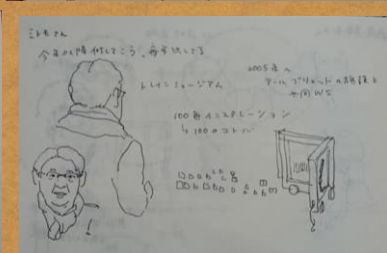
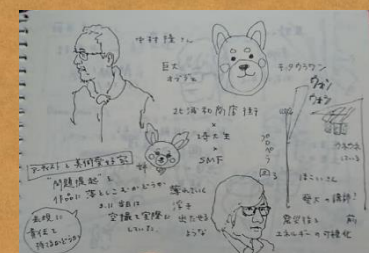
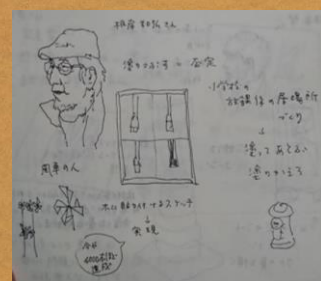
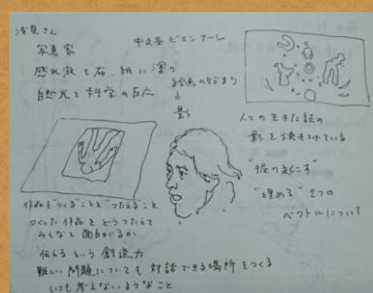
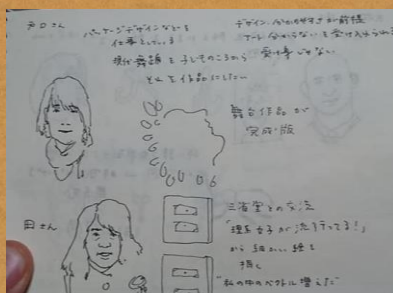
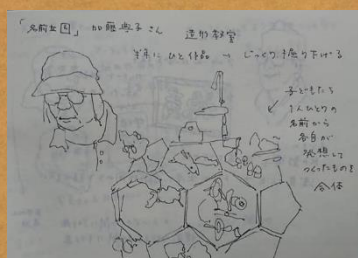
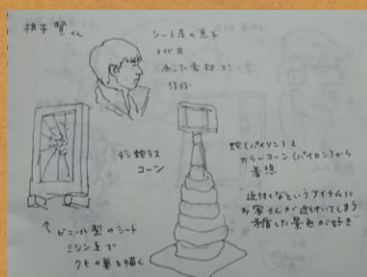
社会人として、クリエイターとして、表現者として生計を立てている人たちとの展示は初めてでしたし、大学3年生の自分としても「結構思い切ったチャレンジかな」なんて怖気づいてしまっていたのに、いざ参加してみたら、高校生が物怖じすることなく堂々と自分の作品について語っているし、その作品自体もユーモアと真摯さに富んだ作品だしで、すっかり自信を無くしそうな、でもそれでいて、頼もしいこの後輩ちゃんたちに負けたくないなというような情熱が胸からこみ上げてくるような、いやしかし何だこの空間は楽しいなおい！って感じの心境でした。故に、ギャラリートークではすっかり熱が入ってしまい、出展者の皆さんが話している様子をドローイングとして描いてしまいました。（笑）（右ページに掲載）

あまり作家として踏み込んだ話を皆さんとできたわけではなかったですが、（作品 No.5）KAPL さんの「本音会議」に参加させていただいてお題に合わせたお話をしたり聞いたり、先に紹介した高校生とも交流を深めたり、ドローイングを通して、「描く・書く」ために「みる・きく」ことを通して皆さんのことを知ろうとしたりすることができたかなと思います。

ギャラリートーク中にドローイングとして描かせていただいた作品や作家さんはしっかりと記憶に残っているのですが、その中でも強く残っているのは、パフォーマンス展示をしていた（作品 No.13「クウのキオク」）の DamaDamTal さんと（作品 No.1「現在の青図」）浅見 俊哉さんのコラボパフォーマンスです。

パフォーマンスの内容も、突発的に始まるフラッシュモブ的な動きと語りの、波とか時間の流れを感じるような

「動」の雰囲気と光を湛えた青色の中空に佇むようなぴしっと止まった「静」の雰囲気が織り交ざるような感じで、とても印象的な作品でしたが、その後の“本音会議”での、DamaDamaTal さんのパフォーマーであるみきたまきさんの異分野の作品・パフォーマンスにおけるコラボレーションの難しさについてのお話がさらに印象深いものでした。「ただ作品の前で踊るだけでは、コラボレーションとして成り立たない。何か、核となるものを（コラボし合う作家・パフォーマー同士が）お互いに持ち合わせていないといけないと感じている」という（ようなことをおっしゃっていたような）言葉が胸に残っています。コラボレーションアートという分野においても、忘れてはならないのが“コミュニケーション”なのだなと考えた時間でした。



刺激をたくさんいただいた初夢でした。
夢を夢のままにしないように踏ん張る！

2018/02/15 たにじゅん

no. 13 DamaDamTal「クウのキオク」



作品展示

「だまだむたるの消えうた」
SHI (絵描き)

DamaDamTal 旗揚げ公演以来、
フライヤーのイラストを担当。
DamaDamTal 公演では毎回、
作品展示も行う。



パフォーマンス展示

「クウのキオク」

キャスト
大塚 陽
木村元郁
みきたまき

13 日のみ
HANA (歌とアコーディオン)
新村隆慶 (ヴァイオリン)





空の気憶。

立ち止まった場所の、通りすぎた時間の
内と外の お天気レポート。

「よってらっしゃい覗いてごらん。」

今いる此处は、悲しい晴れか楽しい雨か
アナタの外は粉雪で、ワタシの内は大嵐。」



この日の空の気憶、あのビルの空気の気憶
それとも架空の気憶？

DamaDamTal のお天気レポート
身体言葉で神出鬼没にお届けします。



1月11日・12日 会場内を巡回しながら、様々な作品とのパフォーマンスを展開。撮影：龍-Tatsu-

1月13日・14日 浅見俊哉 作品「現在の青図」にて、15分間の即興パフォーマンス。撮影：Shunya Asami



no. 13 DamaDamTal「クウのキオク」

SMF 宝船展 2018 @ MOMAS

14 Circlight Communication

チームパワーワード



概要

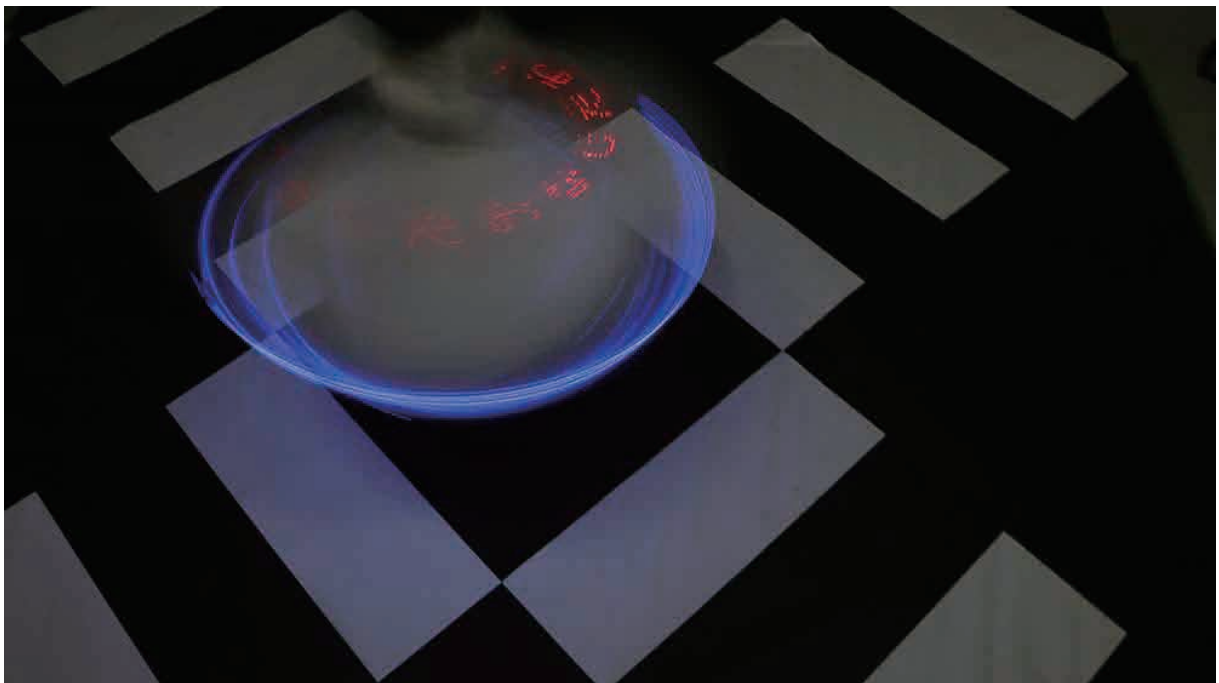
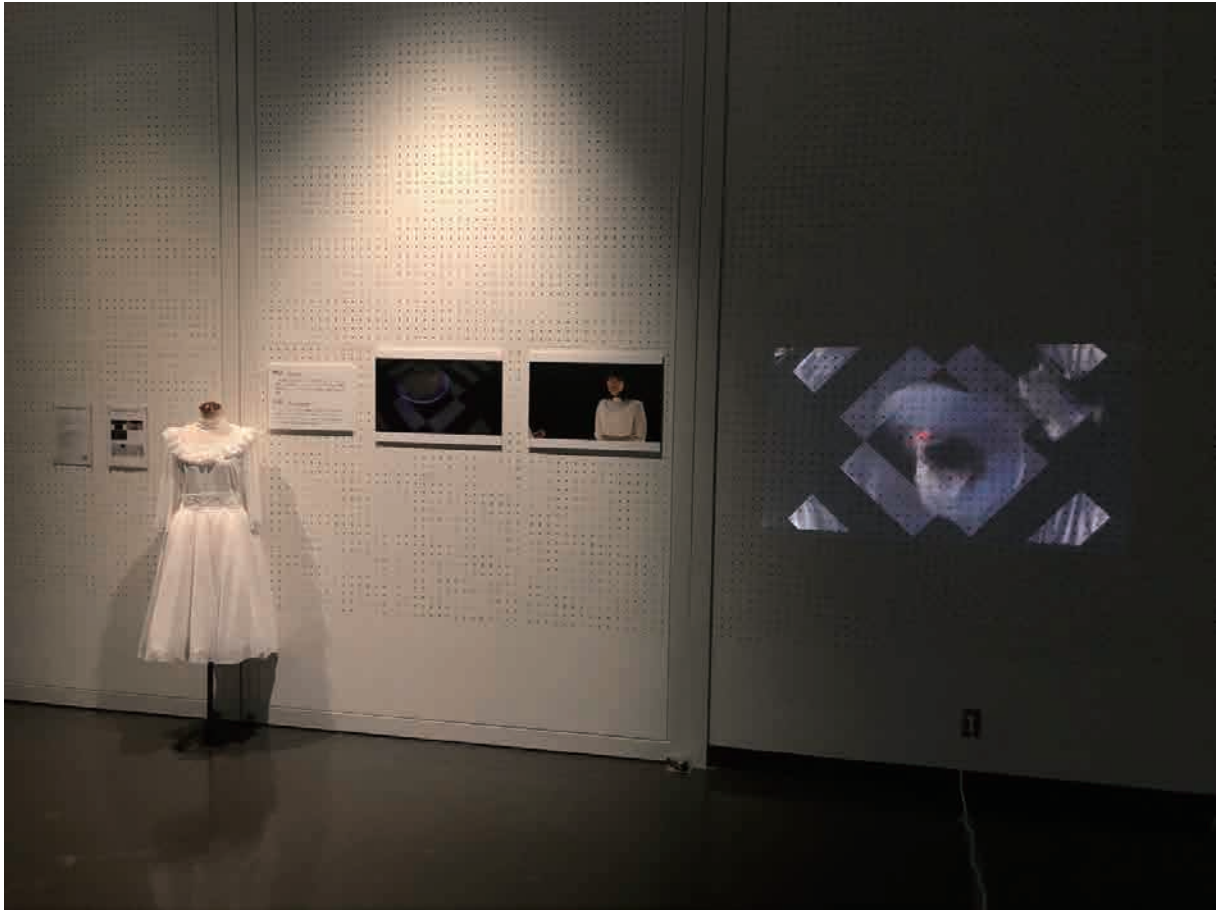
自分の思いを無意識的に且つ正確に相手に伝えるのは困難だ。
他者に考えや思いを伝えるには、何かしら意図的・意識的に行動を起さなければならない。
その行動のひとつとして、人は言葉を使う。
言葉には相手に伝えたいという意思が伴う。
しかしその意思がどんなにあったとしても、
伝えられた言葉がどんなに印象深かったとしても、その言葉の存在は一瞬で消える。
しかし、受けた言葉は時間が経つにつれて薄れながらも思い出として心に残る。
そのコミュニケーションが持つ一瞬のきらめきと儚さを可視化したいと考え、
わたしたちはこの『Circlight Communication』を通して表現した。

構造

このスカートは二重構造になっており、
生地と生地の間に LED が付けられた基盤が入っていて、
スカートを身につけた人が回転すると LED の残像により文字が表示される。
そのメッセージは回転する間のみ認識することができ、
回転スピードが遅くなるにつれ読みづらくなり、最終的に消えてしまう。
「日常的な行動・動作は、その思いの大小はあっても何かしら意図が必要であり、
またその行動・動作はいくらその意図が大きかったとしても、時間が経つにつれ薄れてしまう。
そして伝えたいという気持ち・動作は相手にはどう伝わってるかわからない。」
という日常動作の特徴である 3 点を、
「自分自身が意識的に回転することでしか相手に思いを伝えられず、
また回転している間しか文字が正確に認識できず、
動きを止めると残像が曖昧になり、記憶が消えゆく寂しさを演出した。
そしてその表示された文字は、相手からは見えても自分自身で見ることはいできない。」
という形で『Circlight Communication』の特徴とした。

備考

武蔵美と資生堂のコラボレーションとして開設された授業内で制作。
与えられたテーマは Lifetransports
2017.12 に資生堂銀座ビルにて展示『Re: LINK OF LIFE』を開催。



出品者番号 : 15

作者名 : 田 幸樹枝 (でん ゆきえ)

作品名 : ガリバーの国に迷い込んだ君へ

ガリバーの旅行には、4つの国があります。その中から、<こびとの国に迷い込んだ君へ>のバージョンで、発表しました。

展示作品は、<こびとが描いた絵>をモチーフに、ミクロサイズの和紙に、墨で絵を描き、プレパラートにセットして、拡大鏡で観てもらう、という試みでした。

〔展示風景〕



思いがけず、拡大鏡を手にしたちいさな女の子が、お隣の三友さんの作品を覗き込んだり、企画書の<こびとが描いた絵>という図を拡大していたり、面白いリアクションが見られて、とても刺激的でした。





〔まとめ〕

ものすごく小さく描いてみたい、という試みが、面白がっていただけたことに感謝いたします。このような機会に、参加できましたこと、発表の場をいただけたことに感謝いたします。

制作も、自分を面白がりながら、楽しくイメージを膨張させることができました。自分でも、やってみて、こんなに小さな絵が描けたことに驚いております。

次回展に向けて、またイメージがわいております。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

16.だい 17.鳥が会う とうゆう



だい（右） 2017
鳥が会う（左） 2017

どちらも描画にはクレヨンを使用。
ただし「鳥が会う」は原画
「だい」はPCにて加工し、印刷したもの。



だい

橙（だいだい）
大橙（だいだいだい）
代々大橙（だいだいだいだいだい）・・・
いったいこのだいどこまで続くんだい？

といったように「だい」が続々と連なっていく
絵本風の作品です。

一見するとばかばかしくくだらないですが実は東京オリンピックを前にふと日本人としてのあり方を考えそのアイデンティティたるものとして日本語に着目し他の言語には真似できない日本語特有の自由度の高さを追求した結果この作品が生まれたわけではなく、同じことばの連なりがなんとなくおもしろいかもしれないと10年前に思いついて3年くらい前に思い出し昨年ようやく制作に至るといった調子なので結局のところただのばかばかしくくだらない作品だということを悪しからずご承知置きください。



それではいったいこの「だい」はどこまで続くのか、その全容はこちらにて紹介しています。

<https://www.instagram.com/p/BeEXNSgDHvf/?hl=ja&taken-by=rakugakista.toyu>

A small, square, dark brown wooden frame containing a watercolor painting of three yellow chicks on a green background. The painting is signed 'E. E.' in the bottom right corner.

この中に隠された5文字のメッセージを探し出す、というちょっとした謎解き風の内容です。

答えが導き出せた方はその5文字をこちら rakugakista.toyu@gmail.com までお送りください。そしたら、そっくりそのままそのことばをお返ししたいと思います。

あみだくじがアナグラムの装置にもなり得るという「発見」。

制作にあたり重要視したのはその部分です。料理でいえばそれが食材であり、メッセージは添加物でしかありません。あることばが**あみだくじの線**をたどることで別の**ことば**に生まれ変わる様を頭に思い描いてほしい、そういう作品なのです。

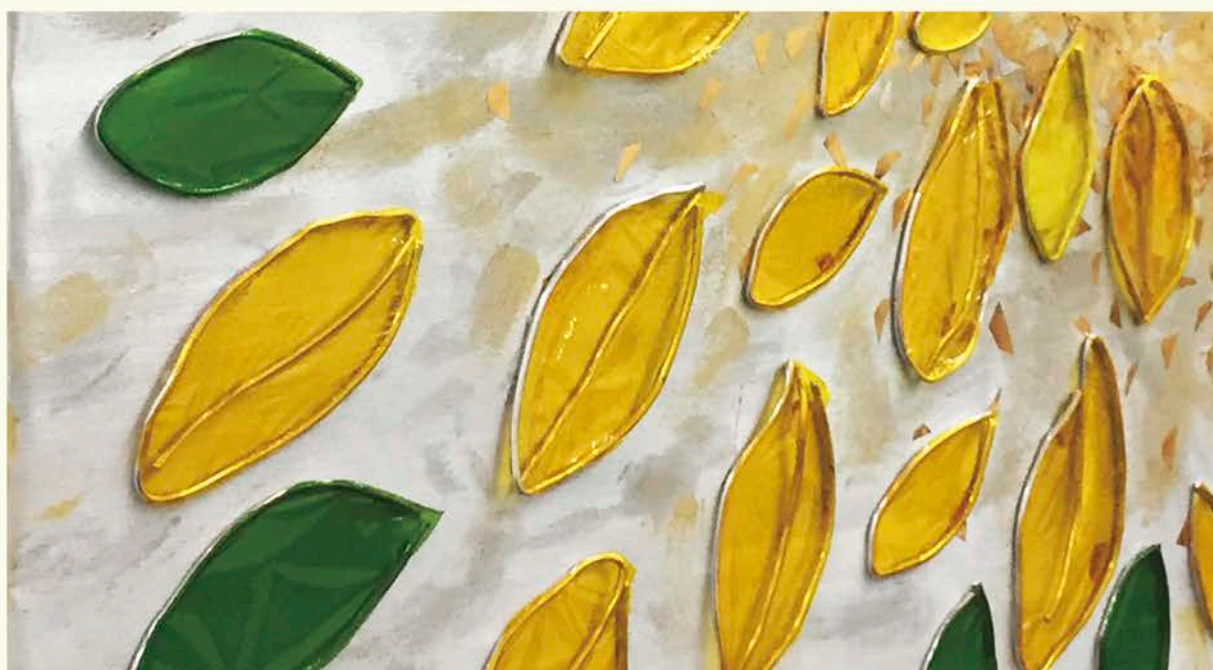
アウトリガーアウトリガーあうとりがーあうとりがあうとりがあう・・・



No.18

(タイトル未定)2018年の挑戦と希望のストーリー

戸口 未貴



〈作品の意図〉

モダンバレエ（現代舞踊）で表現する予定の作品の前置きとして平面構成の作品を発表した。

進化し、発展した現代でも、勝ち抜き這い上がる苦しみがある。

むしろ、モノが溢れ、豊かで便利であることが難点かもしれない。

私は子供の頃から、モダンバレエをはじめとする舞台に関わり、舞台に上がる苦しみと、そこから立ち退くことができない矛盾と常に葛藤する。この2点が私の中で重なったときに、私の神話と成った。

神話でありながら宗教にならなかったギリシャ神話を参考に、「私たちの神話」を作りたい。哲学的で、神の力ではなく自分で、語り継がれるような作品を目指している。

予定では5人前後のダンサーで「自由」や「戦士」、「母性」、「歓喜」の役割を分担。

2018 年中に、舞踊コンクールの創作部門で発表予定。



展示の様子

〈感想〉

舞踊は、絵画や、小説、詩…様々な完成された作品をモチーフにすることがあるが、今回、そのモチーフを自分で作るという試みである。

そのため、この作品の意図がうまく伝わらなかったかと思う。

現在、作品制作を進行中。今後、舞台に向けて、精進したい。

No.19 さぎ山の現場＝中村元の記録

SMF 宝船展 2018

ジャンルを問わず自慢の力作を一堂に会し懇親を深め繋がる宝船展は他に類を見ない藝術の祭だ。年間で大変楽しみな SMF の催しの一つだ。今回は、参加する表現者も、顔馴染みの人、若き新人、30 数組と多才でギャラリーも老若男女 家族 友達同士と年々増え 広がりを実感する。

“野良の藝術” 里山の現場 2017

SMF2016 年度 記録係りの私は、社会芸術/ユニット・ウルスの皆さんの多賀谷田んぼでの粃殻薫炭作り等の記録に携わり、2017 年度は社会芸術/ユニット・ウルス協力者として “野良の藝術” 里山の現場 2017 で格闘するは皆さんを写真で記録し。見沼周辺の豊かな自然を体感、其処で暮すひとたちの生活の深さをあじわい、社会芸術家 吉田富久一氏の視点を記録に出来たことは嬉しかった。

人に役立つ可能性を秘めた化石樹と言われるメタセコイアが伐採され野積みされた景観には驚いてシャッターを押した。これも鷺山の生活の深さかと感じた、吉田氏がメタセコイアで作る炭を焼く窯を新しく築き「しめ縄」で仕切られた空間には、街中では感じられない、写真でも表現が難しい畏敬の念を感じた。

熟れた柿の実が残る畦道の対側に櫟の林があり 木々の間に紐を張り手作りの衣文掛けで「キモノ」の虫干しを試みた萩原家のイサギよさ、その作り出された景色はキモノがアートに成った瞬間だった。





思い出の沢山詰まったキモノを違う空間に虫干し出来たらと!! 妄想が止まらない。

宝船展 2018 で里山の現場記録写真を社会芸術/ユニット・ウルスの皆さんのコーナーに展示出来て嬉しかった。

永い間 人生をして来たが今度の宝船展で若い方から刺激を受けた作品(言葉)がある。其れは内野知樹 君の作品「ほころぶ」だ。私の営む呉服店では中々発想出来ない言葉だ 着物の業界では「ほころぶ」は「ほころび」につながりほころびは糸と針で繕うと言う事なのだ。

私も写真合成で「妖精」の世界を創っているのだがこの「ほころぶ」の言葉により又 別の世界が開かれる思いがする、これからは思考の中に使わせて頂こう。

今回の SMF 宝船展を通して多く人が繋がり夢を具現化し SMF 宝船展が更なる喜びの藝術祭に成ると感じた。主催者 埼玉県立近代美術館に感謝！ 来年も宜しくお願い致します。

2018年3月 吉日

SMF 会員 中村元

SMF TAKARABUNE-EXHIBITION 2018

作品 No.20 中村 隆

作品タイトル：今年の干支は、きたうらワン!

今年の干支は、戌（いぬ）。そこで SMF と北浦和西口銀座商店街との協働で生まれた地域活性型ゆるキャラ「きたうらワン」、ファミリーも増えて今年には更に活躍の年です。

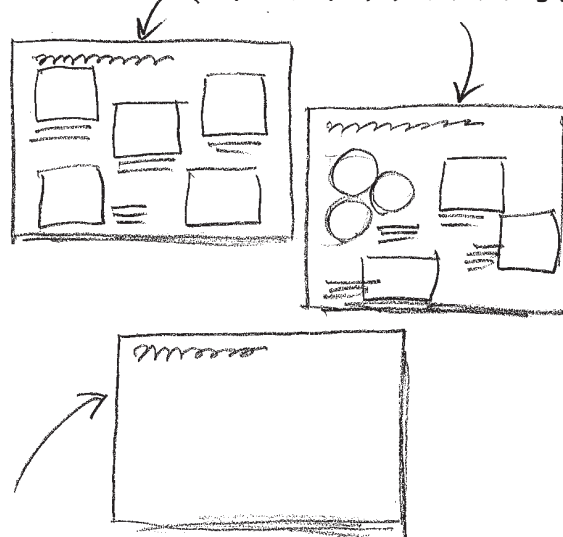
北浦和西口銀座商店街では、さまざまなイベントに登場して人気の「きたうらワン」ですが、北浦和だけに限らずより多くの地域と皆さんに愛されるキャラクターを目指して、アピールしていきたいと思います。

例えば、「きたうらワン・ファミリー」を使ったグッズなどの商品化計画や素敵なアイデアなど夢の実現ができればいいですね。

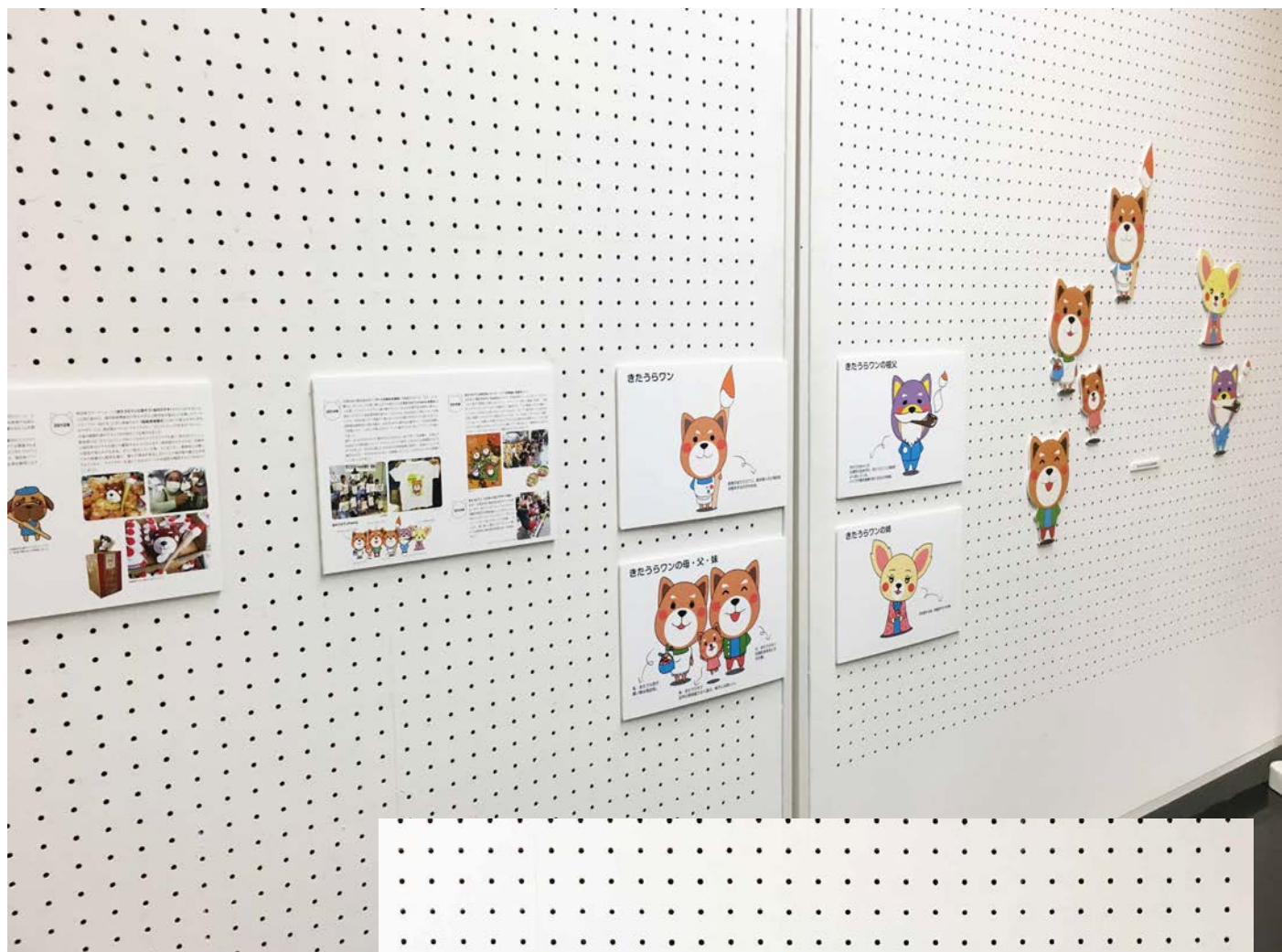
きたうらワン・ファミリーと記念写真



イベントやグッズの写真



いろいろなアイデアを
来場した人に
書いてもらうスペース



▲きたうらワン誕生から、商店街イベントでの活躍をパネルで紹介。



▶きたうらワンファミリーと記念写真コーナー。

No.21.22

ROCO NISHIO



西尾 路子

solid@plane://22 猫・猫/2017

ひとつの境界を超えることが出来るなら『平面⇄立体』面白い かもしれない

既成概念にとらわれているような生活者の私は、いまだに立体的に生きているようには思えないのであります。

20年前の1998年
「平面の絵は無駄なく立体に、椅子とは、他者と分かち合うエロス」なんて、言って来ているのだけれど、他者との関りもフラット、ましてや無駄だらけのような制作を性懲りもなく続けている。立体的に生きるとは何？…テツガクです。

～♪まいごのまいごの子猫ちゃん♪あなたのお家はどこですか？～♪(詩:佐藤義美)

なんて曲が、流れてくる。



solid@plane://23 大・犬/2018 miniature model

近頃ネコブーム 何気なく猫を描いてみた

夢中になって描いているうちに『猫』と『描』の字が似ているのに気付いた。

題名は『描・猫』に、決めた2017年。

当初『平面⇔立体』は『幾何学/抽象画』から『立体』へ...

ベンチ. テーブル. 椅子 & 机. 本棚. ベッド(実際に横になって寝られます). ロボット等に展開。

2016年からは、展覧会の趣旨に合わせて『具象表現』を取り入れた「桜」「紫陽花」「目玉焼き」から『立体』へ...

そうすると観客は、「次は〇〇!」と、様々なモノの名前をあげてくるからオモシロイ。

猫の次は犬でしょ!
今年は戌年「わんだふるわんだ-」ですわん。
1/5 のミニチュア
solid@plane://22 犬・犬 /2018 miniature model を発表。6 月実物予定。

『平面⇔立体=すわる』
パフォーマンスを、機会あるごとに生演奏と共に観客を巻き込んで行っている。

今回は、PC にて画像をエンドレスで流した。



おまけ solid@plane://22 描・猫/2017 miniature model

『平面』と『立体』は『=』であり『⇔』なのです

床面の白色のモチーフは「塗る」ワークショップを待っている品々である。
(木の葉、木製木箱、紙コップ、紙皿、小石、フィギュア等よくある物です)

「塗る」のキーワード ①描く → 創造
 ②塗り変える → 再生
 ③塗りつぶす → 否定

今回はキーワードに沿って着色したものを数点参考例として提示した。



① 描いて遊ぶ

紙コップは動物顔の糸電話に、紙皿は息で回すフーファー独楽に。これらは地域の小学生とのワークショップでも実践したもの。会場に於いても遊びが創造され、和やかな空気を生んだ。

② 塗り変える (新しい価値の付加)

木の葉 (夏椿、桜) を粘土でかたどり着色。葉脈もリアルになり、カラフルな色どりに「作ってみたい」や「欲しい」等の反響があった。

③ 塗りつぶす。

報道写真 2 枚。「震災鎮魂の為に建てられた木柱が何者かによって黒ペンキで塗りつぶされた記事」「北朝鮮の ICBM 強行発射の写真を塗りつぶした例」は否定の塗りであり、会場では戦後黒墨で一部塗りつぶされた教科書の話が出た。これは隠す塗り。いずれも「塗りつぶす」という行為は、受け手にとって、元の状態への関心とつぶした意図に対し強いメッセージとなる。

出品番号：24



「自動車シート製作材料×美術作品」シリーズ

第1作 「境界面」 根本 賢



7月13日(土) 天気: 晴

今日は、宝船展4日目、
ギャラリートークの日。

どうやらこの家族、
✓ 族

近づいてしまったようです。

出品番号: 25

作者名: 根本 賢具

作品名: デン蛇ラスコーン

楽しそうですね。

No. 26

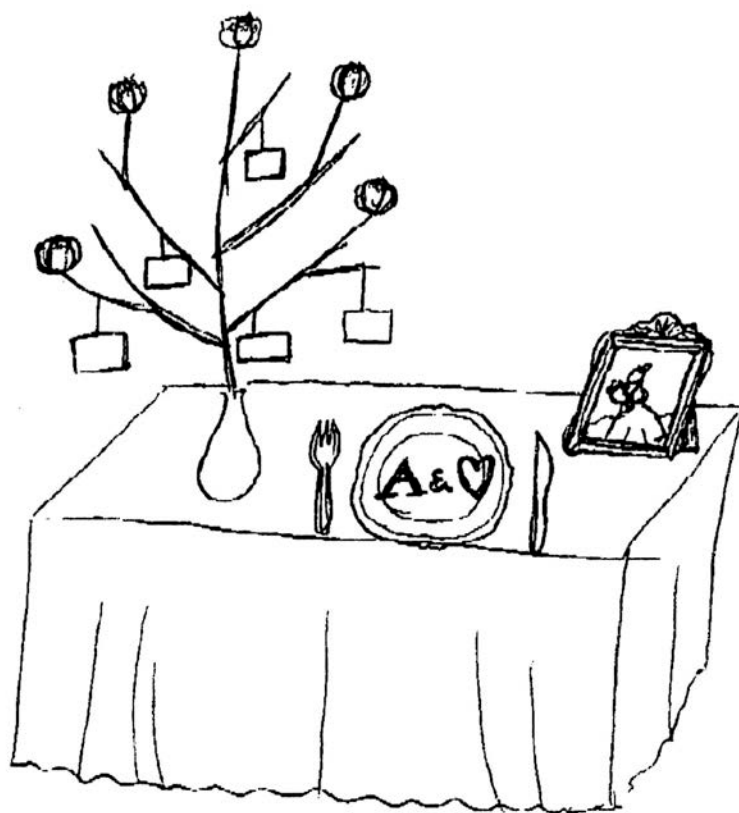
Name 作家名: 藤井 彩加

Title of the project (work) プロジェクトまたは作品タイトル: Just Married

Year of realization 実現(予定)年: 2020 年

Description プロジェクトまたは作品についての記述:

結婚式のウェルカムスペース、ファミリーツリーを
“未婚の者の夢”として表現・展示する。
自分の模擬結婚式としてプラン・作成する。
結婚式は自己表現であるため。





Name 作家名： 藤井香

Title of the project (work) プロジェクトまたは作品タイトル： 沈む舟

Year of realization 実現(予定)年： 宝くじが当たったら、その年

Description プロジェクトまたは作品についての記述：

抗えない節理、抗えないサイクルの中に「存在する」ということを感じられる舞踊作品を作りたいと思っている。

舞台構成、演出、内容の肉付けは、まだこれからだが、今考えていることは、迫ってくるような壁や、シーソーのように動く客席にできたら良いな、と思っている。観客といえども、うかうかとは見ていられず、ここに組み込まれて行ってしまうような……。

ただ、これは「今」考えていることであって、「今」の考えはどんどん捨てて、変えて行く。なぜかと言うと、初期段階の私の発想は、いつも幼いからである。しかし、この作業は、「できそうにないからあきらめる。」という言い方に変換することもできる。

そういえば、SMFには優れた建築家の方々がいらっしゃる。私は、彼らと一緒に子供向けのワークショップ「かいじゅうたちのいるところ」や「おむすびころりん、おなかの旅」をやった時、彼らの魔法使いのような実力をこの目で見ている。彼らなら、この案にそれほど遠くない、優れた、しかも低コストで済む方法を知っているのではないだろうか……。

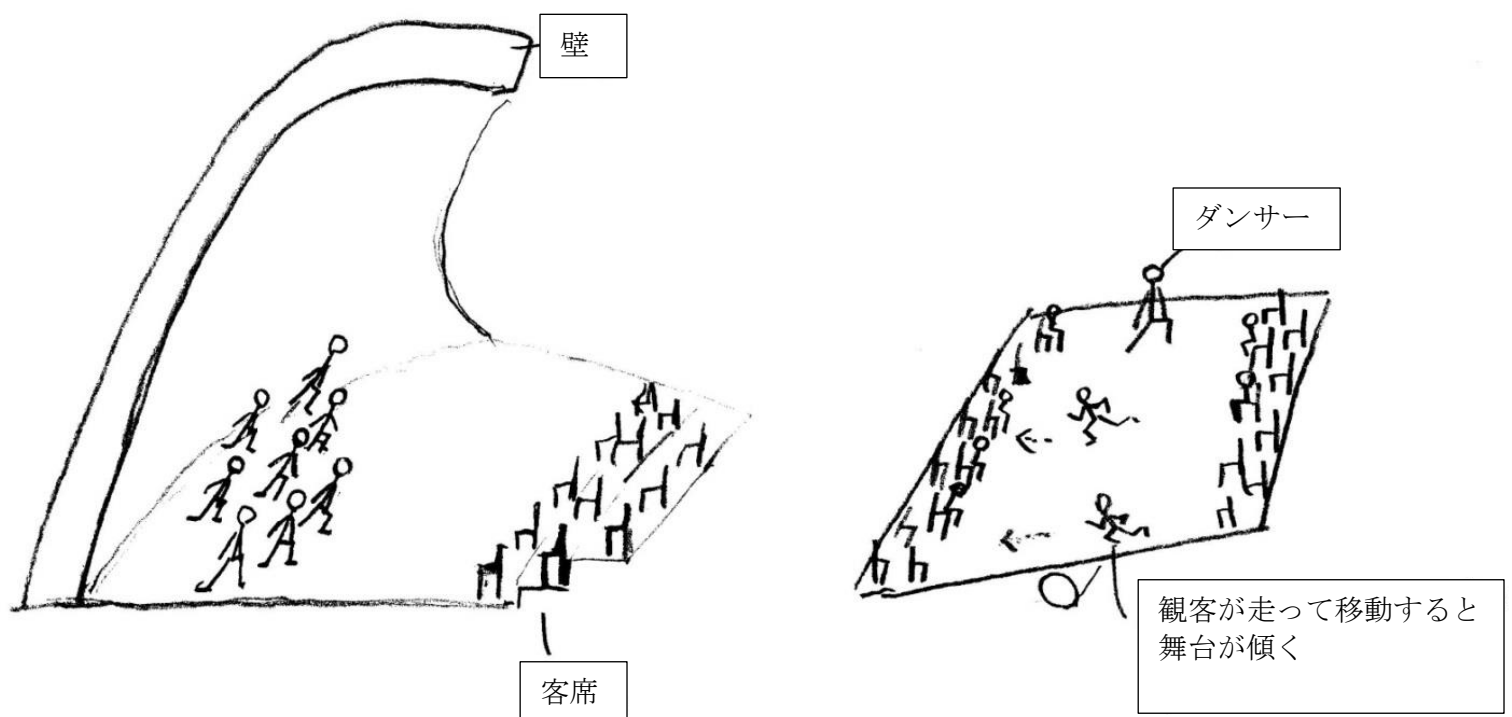
そういえば、SMFには優れた日本庭園を造る方々がいらっしゃる。北浦和公園に作られた「雲上に遊ぶ」というタイトルの、竹で作った雲の上の茶席は、圧倒的な存在感と創造性を放つ作品であった。

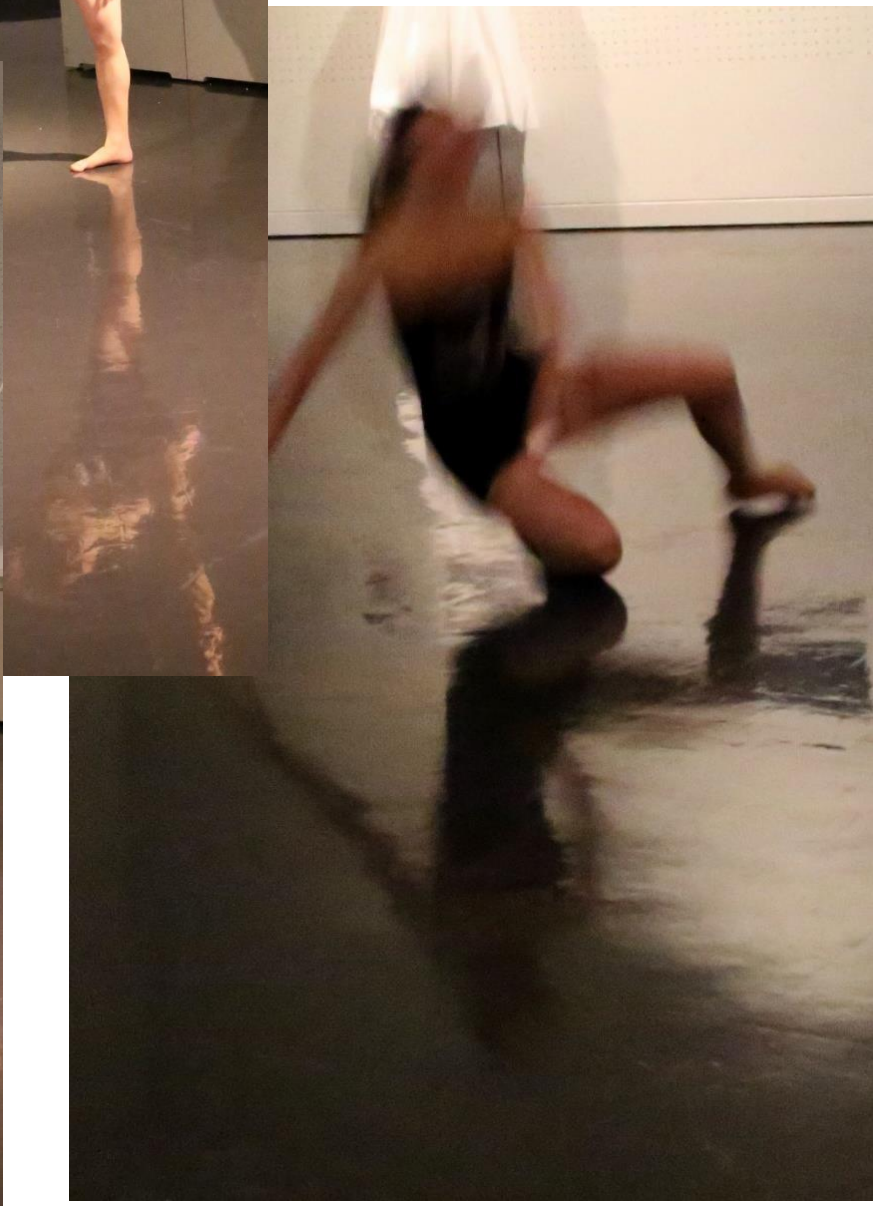
芸術と、現実の両方に根を張って生きているように見受けられる、建築家と作庭師の方々の造形の強さは、この上なく新鮮で、接していて楽しく、また目標でもある。あのよう強い作品を作れたら…と思うし、彼らと仕事してみたい。

さて、「沈む舟」は、ダンサー8人による30～40分作品にしたいと思っている。音楽は佐藤聰明作曲の「エメラルド・タブレット」を使用し、衣装デザイン&製作は、中村春子さんにお願いするつもりだ。

今回の宝船展では、この作品の中核をなす4分程のソロパートを作り、発表した。少し説明すると、静かにすべるように進む舟の両縁に足を置いて立ち、舟の動きに従って、静かに左右に揺れるさまを描く動きからスタートしてみた。沈む舟の中では、人の世界の時間軸と事象が壊れて、同時に秩序なく存在するような瞬間が起こる気がしたので、それを表現しようと模索した。ダンサーには、娘・藤井彩加に出演を依頼した。

写真：「宝船展アーティストトークにて」／撮影：中村元

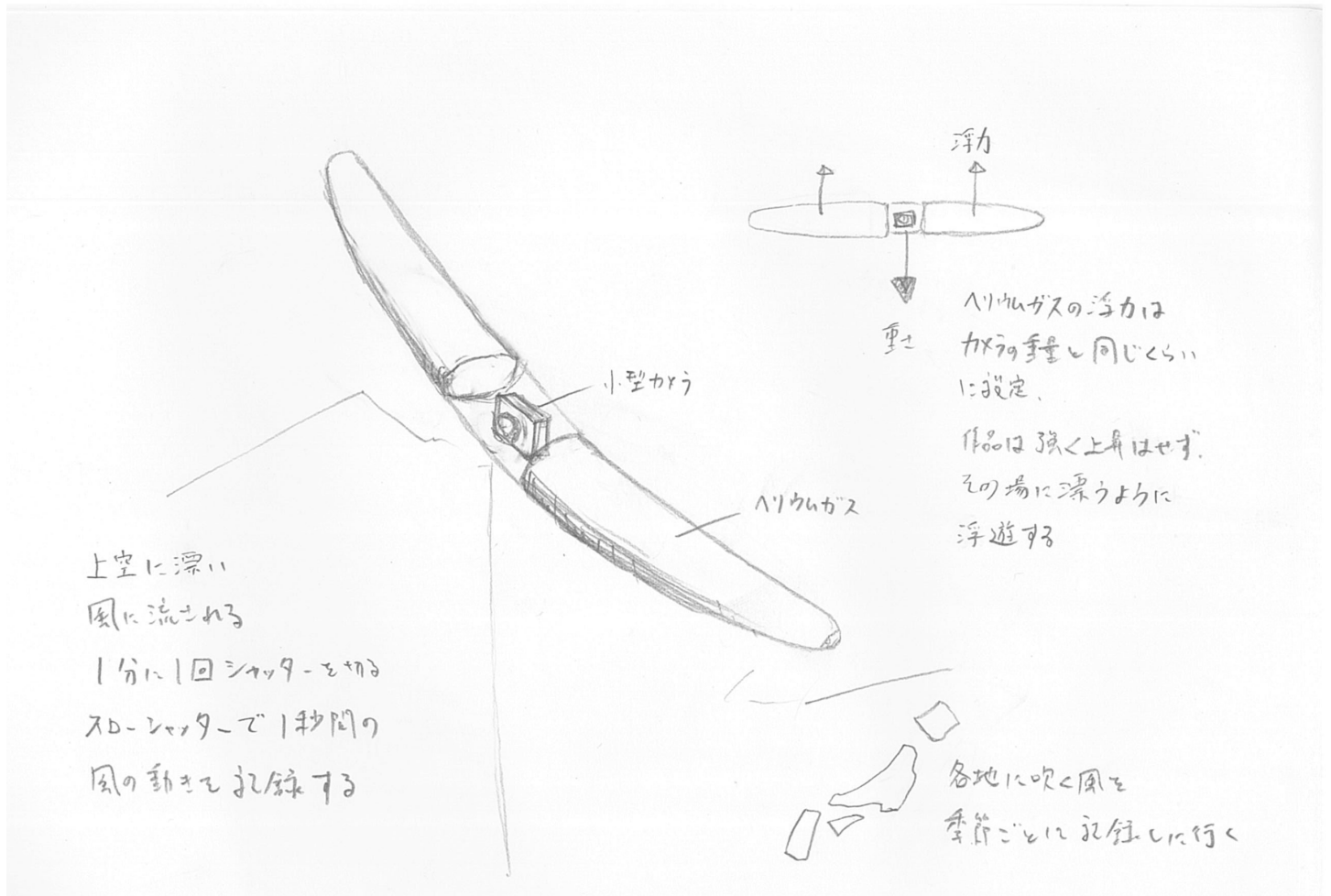




《 SMF TAKARABUNE-EXHIBITION 2018 》 ENTRY SHEET

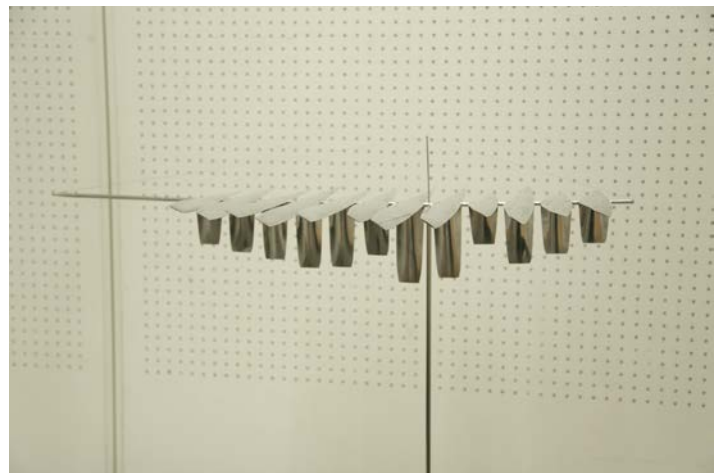
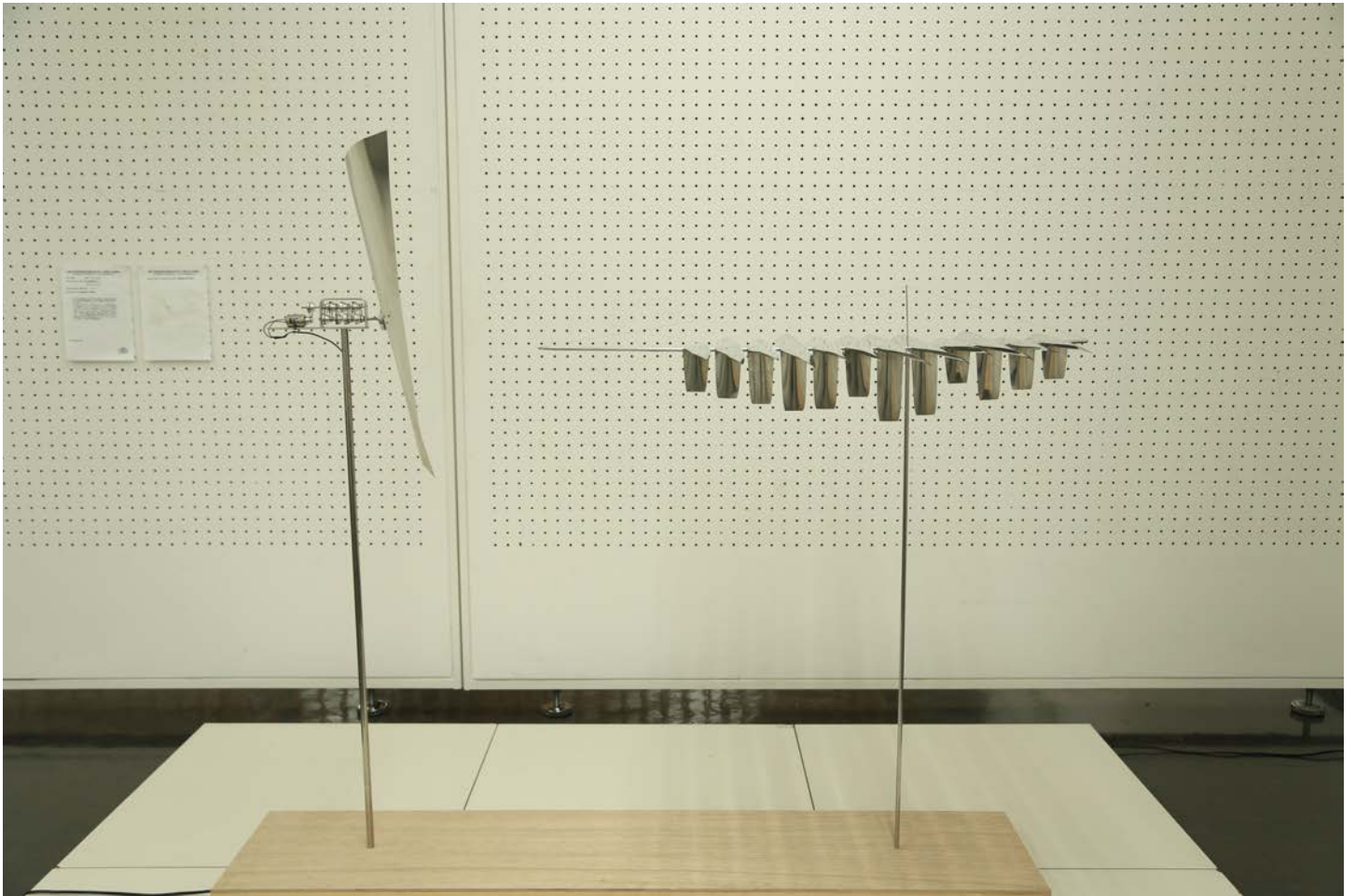
SMF 宝船展 2018 出品票 (夢のシート・アートプロジェクトの案) 作品イメージ

Reference images (drawings, photos, models) 参考図版(素描、写真、模型など) :



《SMF宝船展2018 展示作品》

Existence



作品の右側は2008年に制作したもので、屋外に設置し、風を受けて動く彫刻作品です。風を受け翼が揺らぐことによって、自然の中の目に見えない風を可視化するというコンセプトで制作をしています。今回、室内での展示をするにあたり、作品の左側を新たに制作し、一つの新しい作品として発表しました。

作品の左側は電気というエネルギーを動力装置を使って風に変えるという役割を担っています。コンセントから得たエネルギーをモーターや、幾つものプーリーといった大掛かりな駆動装置を介して、轟音を立てながらプロペラを回転させ風を発生させます。そしてその風に右側の翼が反応します。本来、自然の風で動く作品がエネルギーによって動かされる姿はエネルギーを顕著に可視化させます。

エネルギーも風と同様に目に見えない存在です。人は見えないものに対して存在を忘れてしまう、なかったことにしてしまうことがあります。見えないという一見、不確かに感じる存在を改めて意識するきっかけになれば幸いです。



狭いが高い展示台による展示。
コンパクトにまとまり一体感があり、
見やすい高さで急須の繊細さが
伝わった。
しかしまとまった置き方をしている
ため個々の特徴が薄れてしまった。

Piyo

個

器に宿るUnique

星野
佑太

出品番号29

平成29年度
埼玉県立美術系高等学校
卒業製作展

広いが低い展示台による展示。
並べ方に余裕がありうまく「個」
を表現でき、低い展示台を見下
ろす形のためそれぞれの違いを
俯瞰的にみることができた。
ただし近くでは見づらいため急須
の細かい部分は見づらい印象
だった。



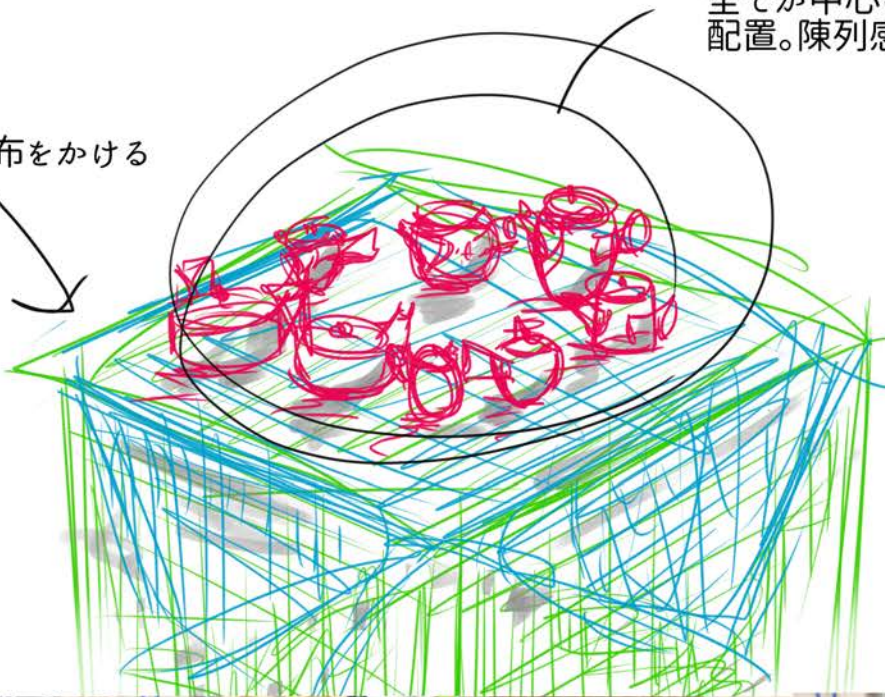
急須

急須というのは他の器、茶碗や湯呑みと違い「性能」という概念のはっきりしたプロダクトである。そのため急須をデザイン、制作するということは「お茶」という第三者的ポジションまでもをデザイン、制作すること、それが可能だということを意味し、形状以外の部分にも存在する急須一つ一つの個性、オリジナリティの強さが現れる。

普段あまり焦点を当てられることのない急須という「うつわ」の良さ、面白さを見て、そこから生まれるお茶にも意識を向けていただきたい。その思いで今回、形状的デザインのみならず内部構造にもこだわり、性能も個別にデザインした8つの急須を製作した。

全てが中心を向くように台に配置。陳列感を無くす。

背景色となる布をかける



会場では、作品を見てくださった方々は急須それぞれの造りを見てくださり、「綺麗だね」「使いやすいそう」と言ってくださり製作のモチベーションになり、特に「使いたい」という声が嬉しかった。人に使いたいと思っていただけるような使いよいものを作ることを目標としているため、この言葉が聞けたことが今回最大の収穫だったと言える。

Name 作家名：三浦 清史

Title of the project (work) プロジェクトまたは作品タイトル：

The Wall of 千鳥格子と‘き’がわりの假具

Year of realization 実現(予定)年：ぼちぼち

Description プロジェクトまたは作品についての記述：

■ 住まいは短寿命であればあるほど良いと考え、それを実現するための^{インフィル}舗設となることが、それがこの‘き’がわりの假具の目的です。

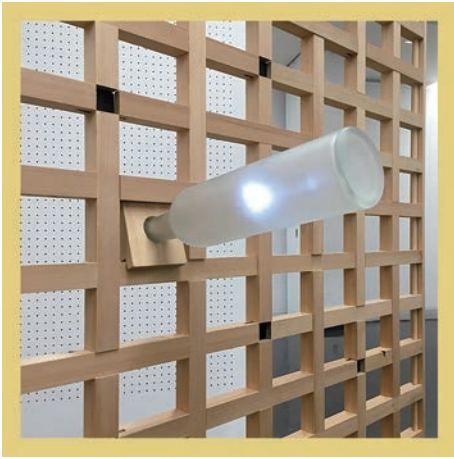
■■ もちろん器としての「住宅」は、環境資源の論点からも文化の観点からも長寿命であるべきかもしれない。しかし人生は一度しかなく、その時その時の状況、条件を享受して生活しています。従ってさまざまな‘き’に応じてもっとも相応しい空間の中にいることこそが幸せで、「住宅」の中にもこうした‘き’がわりのシステムを持つことができれば「住まい」はせめて‘期’がわりの寿命までがいいだろうと考え、‘き’に応じて着せ替えることができるような仕組みを考えこれを「假具」と名づけました。

■■■ ‘き’がわりの假具はVフレームやWフレームによる軸組、千鳥格子による下地、ファスナー止めによる仕上の三つの技術をもとに考えています。そのアウトプットは既存の部屋に入れ子のように納める今日の方丈と、ヌードの「住宅」にセルフビルドで仕上げてゆく下地と内装のカバーリングシステムです。

■■■■ かつての日本の「住宅」には完成されずに徐々に出来上がってゆくという仕組みがありました。例えば土壁は荒壁のままで放置して何年か後に上塗りをし、天井は経済的な余裕ができてから張る、母屋に下屋を増築することによって家の規模を大きくした、しかし現在の「住宅」ではつくり急ぐあまり竣工が終点で、それらの伝統が失なわれてしまいました。‘き’がわりの假具によって、住みながら完成させてゆく仕組みと、季節の変化などに合わせて内装を変えられる仕組みを提案したいと思います。

■ ここに展示する「The Wall of 千鳥格子」は‘き’がわりの假具からスピノフした柱間装置のひとつです。





Reference images (drawings, photos, models)

▲
SENSE OF FIELD

佐藤仁美さんの展示

▼
LIGHT OF TEMPLE



▲
THE WALL OF 千鳥格子

▲
‘き’がわりの假具のイメージを展示



No. 31 Artist name / 作家名:shoko miki / 三木祥子

Title of the work / 作品タイトル:

「Indistinguishable Boats 2018」/「夢違い船

2018」Year of realization 実現年:2018年

Description 作品についての記述:

『宝船』という言葉が今のようになったのは後世の事で、元々は悪夢を乗せて流すことを意味するという「夢違い」または「夢払え」の船だ という。その起源は汚れを水に流す大祓（おおはえ。神道儀式の1つ）の発想に基づくともいう。室町時代には、節分の夜か除夜に神社から 船の絵が人々に与えられ、それを床の下に敷いて寝た後に集めて流し たり埋めたりしていた事から、流す物（船）あるいは、払う物（船） として考えられていたという。

今回はこの起源を元に「夢違い船・ indistinguishable boats」のインスタレーションを2011年からコンスタントに撮っている一連の福島に生きる植物の写真作品と共に展開してみたい。

町田ゆかりのアーティスト:

<http://home.wako.ac.jp/user/m-artist/2015/06/post-154.html#more>

<主な企画個展>

2018	クンスト・ラウム、ブレーメン、ドイツ
2018, 2014, 2007	ギャラリー・ ジ・ アース、鎌倉
2016, 2013, 2011	ギャラリー誠文堂、相模原
2015	アトリエ・ K・ アートスペース、横浜
2013	WAH センター、ニューヨーク、アメリカ
2012, 2009	スペース・ インノ・ ギャラリー、ソウル

<最近の企画、招待グループ展>

2018, 2016, 2015	「3.11 - 福島との対話」 コスモスレーン・ ギャラリー、東京 / クンスト・ラウム、ブレーメン、ドイツ
2018 ~ 2012	「トロールの森」 善福寺公園、東京
2017 ~ 2000	『今日の反核反戦展』 原爆の図丸木美術館、埼玉
2016	「eva earth shoko exhibition」 S.Y.P Artists run space, 東京
2016	「日伊国際作家交流展」 東京都美術館、東京
	「LATITUDO 36 - 40」 Villa di Donato / Art Hotel Gran Paradiso ナポリ、イタリア



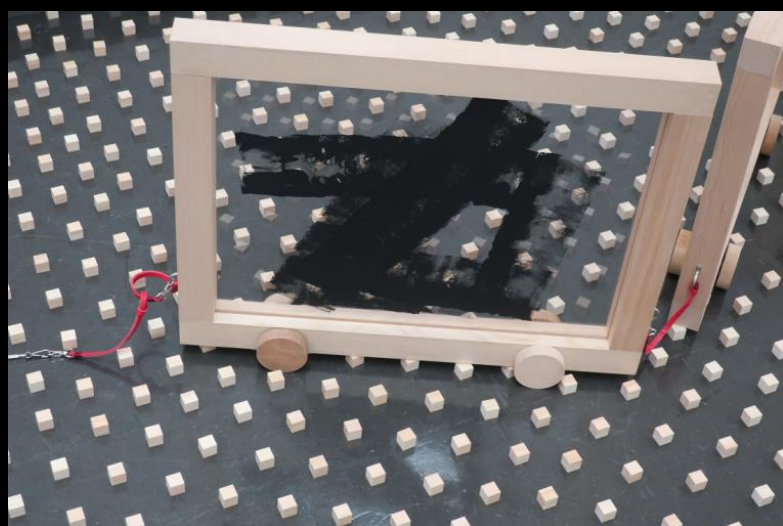
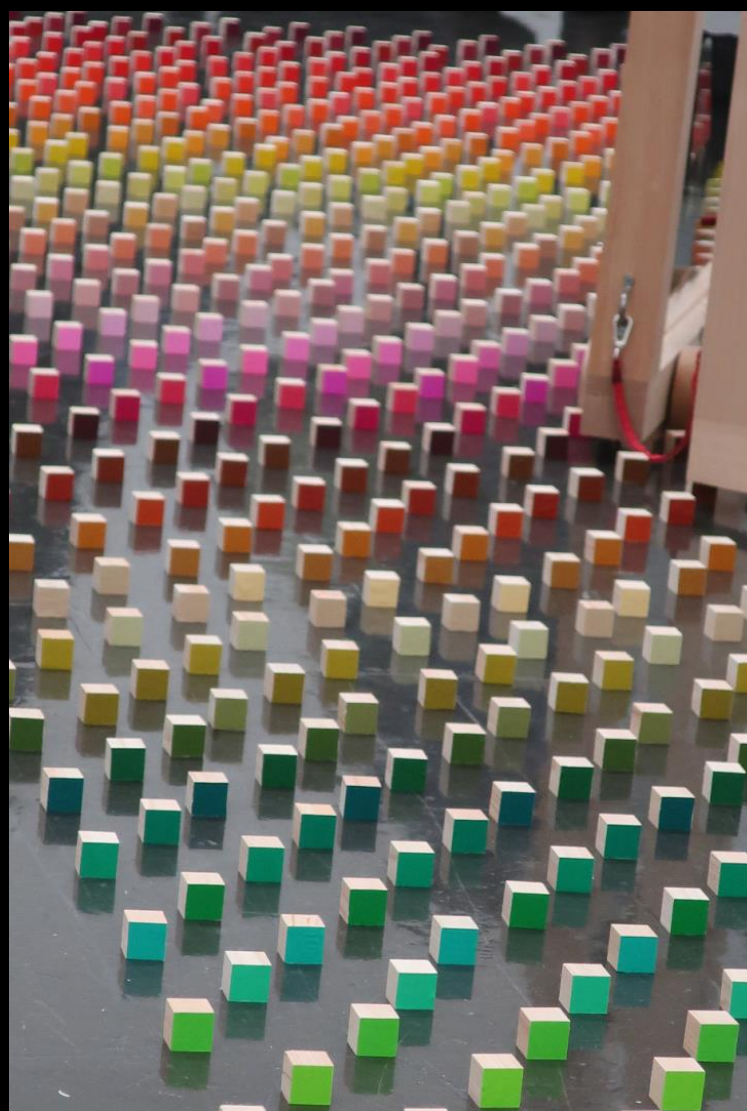
「LATITUDO 36 - 40」 Villa di Donato, Naples, Italy

32

SYUTA(三友 周太)

TRAIN MUSEUM (100 colors have 100 words)

トレインミュージアム(100色100語)





2017年に武蔵野市の武蔵野アールブリュット展のディレクターとして、ギャラリー3施設、吉祥寺美術館の展示構成のキュレーション、ワークショップの実施、受賞作家さんの取材を担当させていただきました。取材を通じて、受賞作家さんの日常での制作活動を見ることができました。受賞作家のひとり、福祉施設の入所者さんはご自身の作品制作のほかに、木工の玩具の組み立ての作業を日課にしていました。

その素朴な木工製品からヒントを得たのが、TRAIN MUSEUMです。

作品を展示できるようなパネルとフレーム構造にして、フレームに車輪をつけた車両は、木工玩具と似た構造でできています。

この模型に作品を額装して、車両をつなげてゆくプロジェクトを提案します。フレームの中には、いろいろな方の絵を額装して車両を連結して展示します。

車両を組み立て、フレームの中には平面作品を展示する、参加者と共に制作するインスタレーションを提案します。

今回の展示では、床一面に2cmサイズの立方体を着色して並べました。

100色には100の言葉が存在し多くの色に接することでボキャブラリが増えると、ある幼児教育専門の先生から伺いました。多くの色が、感性や豊かな心を刺激することを期待し、車両を連結することで人が繋がることを意味するインスタレーションを計画しました。

制作協力:熊切材木店(台東区)

33 夢見る樹 みやうか



上 LED 点灯時
下 LED 消灯時



下の絵は、昼の太陽の光も大切ですが、夜の星の輝きでも植物たちが成長できればいいなと思い、描いた絵です。

以前描いたその絵を触ったりして楽しんでもらうため、立体作品として制作しました。



素材は和紙を使用し、LED で光らせています。

ただ、今回は細部まで光らせることができなかったのが、そこが課題となりました。

次に制作するときは星や植物たちを細部までキラキラさせて、夜でも植物たちが生き生きと成長していくさまをもっとうまく表現したいと思います。



34 星に願いを みゃうか



LED 点灯時

願いごとのある世界中の人々に
流れ星を届けるためステッキを振るい
星を操る小さな妖精の絵です。

こちらにも以前描いた絵の世界の再現
を試みた作品となります。



その妖精が被っている巻貝のような形の帽子を今回は制作しました。



LED 消灯時

素材は和紙を使用。
中に LED を入れ、光るようにしています。
そして実際に被ることができます。

その隣にある星も和紙で制作。
被っている姿をチェックするための鏡を埋
め込みました。
なので絵の中の星とは別物です。

ただ周りが暗かったため鏡はほとんど機能
していないように感じました。

将来的には、星を操る妖精になりきる体験型の展示をしたいと考えています。

光る帽子を被り、妖精の湖（地球から見た宇宙）の前でステッキを振ってもらう。
そうすることで湖の中に星が流れるといった仕掛けの展示です。

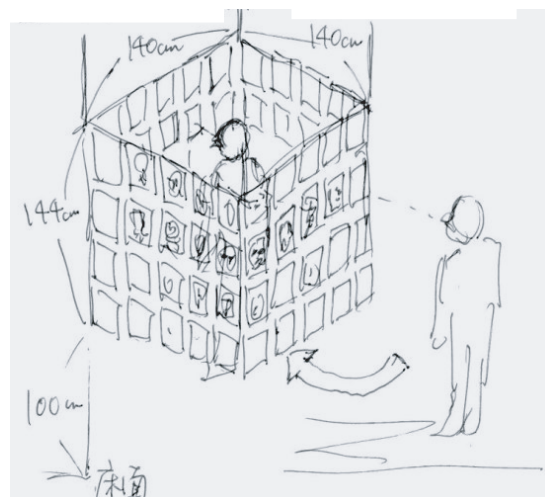
出品番号 36 作家名 矢花 俊樹（金工家、元埼玉県立近代美術館エデュケーター）

作品タイトル 《85 children》

実施年 2018 年

プロジェクト

蕨市立北小学校の6年生が、友達の顔をトレースして描きあげた肖像画85点を用いたインスタレーション。肖像画に囲まれた空間に佇むことで、子ども達85名に見つめられた状態を体感できる。癒されるも、恐怖におののくも、あなた次第です。



ワークショップ「お顔をトレース★肖像画」

宝船展 2018 会場にて、ワークショップを行った。

参加者：16名



①ラミネートフィルムを顔に当てて、油性マジックでお顔をトレースします。描く方も描かれる方も、思わず笑ってしまいます。



②交代して、お顔をトレースします。瞳をトレースされる時は、ドキドキ鼓動が高鳴ります！信頼関係がないとできません！



③ラミネートフィルムの内側にクレパスで色を塗ります。相手の性格や人柄を色で表します。肌色は塗らないこと。これがアートです！



④ラミネーターに通すと完成です！完成した肖像画は、プレゼントし合います。切り抜いてお面にすると相手に大変身することもできます。



《85 children》

コメント

こんなふざけた描き方ですが、トレースしているので意外と似るから面白い。ラミネートフィルム越しに相手を見つめた後は、心のフィルムで相手を見つめ、色で表現します。大切な人との心をつなぎ、一層距離を縮める、ペア参加型のワークショップです！

出品番号 37 作家名 矢花 俊樹（金工家、元埼玉県立近代美術館エデュケーター）

作品タイトル 《旅に誘う虫たち》

実施年 2010年～

プロジェクト

人生を懸けて、リアルな虫を作り続けること。。。

あの日、あの場所で出会った虫・・・

記憶の中の虫たちが、

あなたを、あの日、あの場所へと導いてくれます。

さあ、虫たちと一緒に、時空を越えた旅に出よう！

サウダージ



カナブン（2010）

ゴマダラカミキリ（2010）

オニヤンマ（2011）

ショウリョウバッタ（2014）

イナゴ（2014）

ヒゲコガネ（2016）

ルリオサムシ「父に捧ぐ」（2017）

オオスズメバチ（2012）

ハラビロカマキリ（2015）

技法：彫金

素材：silver 950

サイズ：生体昆虫と同じ



制作について

銀の板材をローラーで加工部位に適した厚さに延ばす。糸鋸で切断し、鑿で彫ったり、打ち出したりしたパーツをロウ付けにより接合する。精密ヤスリで擦り出すパーツもある。（触角、脚は無垢）

胴体は全て中空となっている。この内包した空間が、時空を越えた“あの日、あの場所”へと繋がっていると考える。





写真上：床に：柳井嗣雄「化石樹」／長谷川千賀子「土器ダクト」 背後：中村元記録写真



床三又宙吊り：安部大雅「温故知新」 壁面：フナノ保存会「木づるし」



写真上：床：長谷川千賀子「土器ダクト」 背後：吉田富久一「炭窯図」部分と土器ダクト（煙突）

No.35 社会芸術／ユニット・ウルス



写真左： 加藤学 & 神宮寺未希 & 片岡香穂
「木割りベンチと鍛冶金具」



写真上：中央作品：長谷川千賀子「炭と燐炭、土器ダクト」
背後に：萩原毅「大木伐採図」 日本庭園協会埼玉県支部写真パネル & 竹オブジェ
床：メタセコイアの炭の前で「縄文の韻律」を奏でる森の民（坂野巖、天野陽太、渋谷廣文）

写真下： 神宮寺未希 & 片岡香穂「鍛冶金具」

No.35 社会芸術／ユニット・ウルス

SMF 宝船展 2018 @ MOMAS

会期：2018年1月10日（水）～14日（日）／会場：埼玉県立近代美術館一般展示室

主催・企画：SMF（サイタマ・ミュージアム・フォーラム）／共催：埼玉県立近代美術館／38作品32名（グループ）参加

「“野良の藝術” さぎ山の現場 2017」活動報告

社会芸術／ユニット・ウルスでの参加

- 作品参加：安部大雅 柳井嗣雄 長谷川千賀子 加藤学 & 神宮寺未希 & 片岡香穂 日本庭園協会埼玉県支部 渋谷廣文 吉田富久一
- 別枠参加：中村元 ○パフォーマンス参加：ジャパン・アニミズム（坂野巖 & 森の民 + 森山哲和）
- 記録参加：萩原毅 萩原さとみ フナノ保存会 池田照雄 吉川信雄 石崎幸治 ○協力：ファーム・インさぎ

藝術の根源は農にある

「藝術」の意味が、今日の有機栽培の基礎となる縄文の農耕に辿られ、創造性の意が込められる。だが、この語が日本に資本主義をはじめて導入した明治政府による造語であるとは皮肉である。

高度に発達した資本主義の経済システムでは、貨幣がデジタルに置き換えられて、尚も利益の追求が続けられる。食糧増産によって世界人口を増しながら、都市が耕作地を食い潰す矛盾を孕み、地表は人類史上希有な過飽和状態に陥っていく。このまま行くと、かつての古代文明と同様に窒息し、自滅の途を辿るのかもしれない。

ところが、日本では資本主義の到達点を過ぎて少子高齢化が進み、100年後の人口は3分の1に激減が見込まれる。これを文明・国家の崩落と捉えるか否か。自滅の回避には現況を乗り越え、未来に向けた新しい社会システムの構築が急務となる。この機に根本基準を改めては如何だろうか。

我々は藝術を農に帰結させ、創造性に富んだ生活を回復するために、沃土のつくり方に注目して循環再生の自然の理に基準を置く。見失った目的と進路を修正すべきと考えるからだ。「野良の藝術」里山の現場では、その目的を獲得する手掛かりとして、メタセコイアに挑んだ。この度はその報告である。

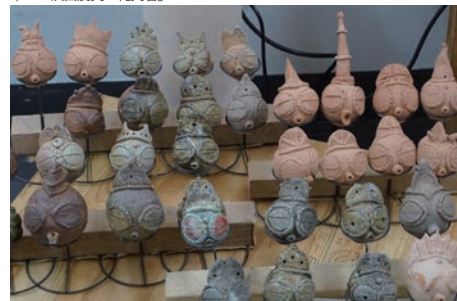
化石樹とされていたメタセコイアは70年前に生木として中国で発見されて以来、世界中より注目を浴び、苗木が植樹された。さいたま市内にも見沼に並木道があり、見沼自然公園、さぎ山記念公園の他、別所沼や北浦和公園にも植えられている。こと、野田地区には苗木農家が密集する故、メタセコイアを取り扱った業者も多くあったが、公園開発が下火になると需要を失くし、苗木のまま畑に放置された。成長が早い故に年輪が粗く、乾燥すると軽いので建築材には不向きとされ、他に利用価値が期待されずに独活の大木と化した。

ファーム・インさぎ山には樵^{きこり}が居り、伐採した樹木が方々から集められ横たわる。その一方で農園主からは「農作物に無駄になるところはない」と名言が発せられ、有機栽培における循環再生の理が語られる。

我々は使途の定まらない材として伐採されたメタセコイアの丸太の山を譲り受け、農の立場に見習い藝術の創造性に働きかけることで、これを将来に向け役に立つ藝術の復権に期待した。「野良の藝術」さぎ山の現場 2017に参加された各々の作家の提案が、かたちに現れていることを願う。

社会芸術／ユニット・ウルス 吉田 富久一

下： 渋谷廣文「縄文君」



柳井嗣雄「化石樹」制作展示記録 2017/10/25~11/12

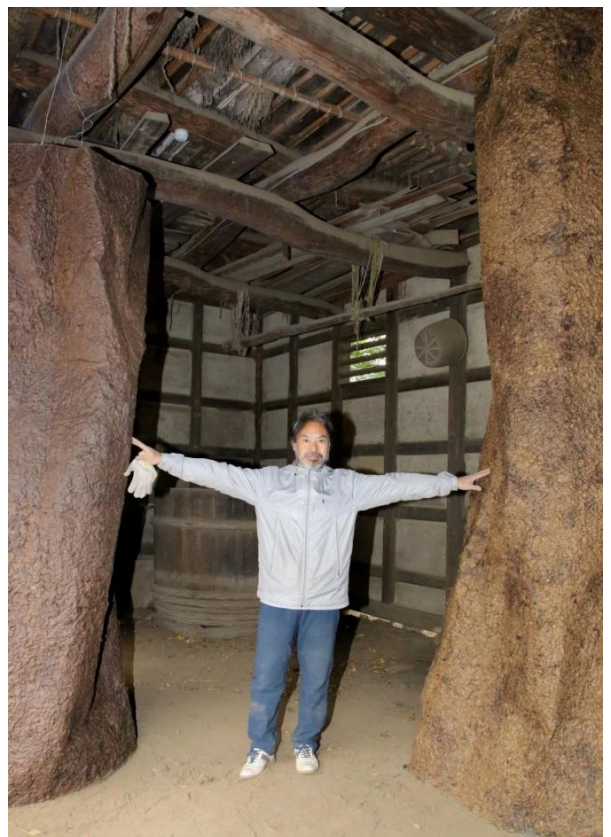


長屋門入口のすぐ右手裏の空間はかつて柿渋作りなどの農事に使われていた

「化石樹」φ130×370cm(flexible) 2体 2017年
メタセコイアの樹皮繊維による紙



深井家長屋門正面



中天井の梁にも太い材が使われている

メタセコイアの発見はドラマチックであった。一昨年（2016年）、見沼で我々が行った「TANBO プロジェクト」で、私は「農と芸術」の関係に興味を持ち田んぼの中に設えたプールで 10m の藁の紙を漉いた。その期間中、道端に山積みになったメタセコイアの丸太を偶然見つけたのだ。今度はこの樹皮繊維を使って紙を漉きたいと咄嗟に思った。

純粹に紙素材の研究からそう思った訳だが、メタセコイアについて調べれば面白い発見がいくつもあった。人類が誕生するよりもずっと昔から存在していたこと、化石しか発見されていなかったため絶滅種とされていたこと、1945年に中国の四川省で現存種が発見され、「生きた化石」として有名になったこと、戦後、進駐軍から日本に最初に 100 本の苗木がもたらされたこと、昭和天皇がメタセコイアを「あけぼの杉」と呼び全国にひろめたこと等々、地球史的、文化史的な想像力をもかき立ててくれる。

さらに、この田園地帯を歩いていると江戸時代にタイムスリップしたような建築に出会った。細い道の突き当たりに、深井家長屋門（さいたま市指定文化財）は堂々と静かに佇んでいた。大きな茅葺の屋根を持った格式のある門構えで、弘化元年（1844年）に建てられた当初の姿をそのまま伝えている。舞台は整った。

まずは原料作りからだ。メタセコイアの樹皮は煮熟時間短縮のため半年前から土中に埋めておいたが、発酵するまでには至らなかった。それでも強アルカリで 2 時間煮込めば充分だった。未知の素材なのでデータがなく、最初の窯では 3 時間の煮熟で繊維は打解したようにボロボロになってしまった。何度も経験している杉皮を基準に考えていたのが間違いだった。杉皮に比べメタセコイアの樹皮は成長が早いせいか樹質と同様、柔らかく脆い繊維なのだ。都合 3 窯、90kg の樹皮から採取できたのはおよそ 25kg の繊維だった。

4×3m プールの中に漉桁を沈め原料を投入。水はプールに穴を開けて地下浸透させた。結局、漉いたのは 2 枚だったが、途中 2 度の台風に見舞われ予定通りにはいかず、設置当日にギリギリで乾燥した。なお、展示は比較のために自宅で漉いた杉皮紙と合わせて 3 体のインスタレーションになったことを付け加えておく。

メタセコイアの身体は空洞化された姿で直立している。紙に変容した樹皮は失われた物質と蘇る生命の間で、長屋門の記憶の中に宙吊りにされ揺れ動くだろう。土地や場所固有の物語はメタセコイアの地球史的時間軸の中で、人間の営みと原初のエネルギーとが連動を始めるに違いない。現実とは違うもう一つの風景が、私たちが住む物質世界にあらたな創造的な枠組みを提示してくれるかもしれないと夢みて。

2018 年 2 月 9 日記



「刺激的な宝島展 2018」

今回初めて宝島展に参加させて頂き、また書道パフォーマンスをさせて頂く機会を与えて頂きまして、感謝申し上げます。今回宝島展の来場者も多く、様々な作品に囲まれまして、多くの刺激と喜びを頂いた貴重な作品展だったと感じました。SMFのミーティングなど参加できないことが多いですが、アートで人を元気にさせたり、笑顔にさせることが出来るように頑張っていきたいです。

今後作品制作でいろいろ試みたい表現がありますので、常に改革の精神で、作品の濃度を高めて鑑賞者の脳裏に焼きつく作品を多く制作していきたいです。今年一年も頑張りますので、どうぞご指導をよろしくお願い致します。



SMF 宝島展 2018
会期: 2018 年 1 月 10 ~ 14 日
会場: 埼玉県立近代美術館 地階一般展示室 1
観覧料: 無料

新年の節目出候い字を
披露いたします。

横田 龍堂

書道パフォーマンス
1月13日(土) 11:30~12:30

SPLAAAAASH!

来場者の方に新年の慶賀を
寄せ書きして頂きます。

茂木 千鶴香

埼玉県立近代美術館

開館時間: 10:00 ~ 17:30 Tel: 048-824-0111 埼玉県さいたま市浦和区常盤 9-30-1

告知DMデザイン 1

横田 龍堂

全身全霊

茂木 千鶴香

書道パフォーマンス
1月13日(土) 11:30~12:30
埼玉県立近代美術館

告知DMデザイン 2

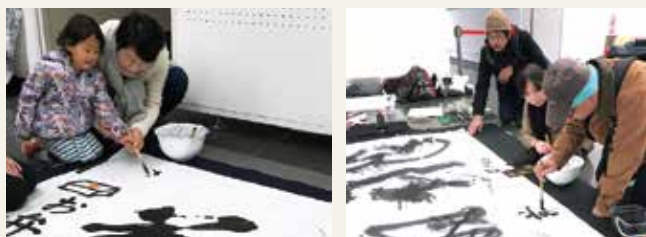


書道パフォーマンスで揮毫した作品



「雅印 荒木桃園 / デザイン 横田龍堂」
日本の長寿の象徴である鶴と、さいたま市の盆栽、筆などの一つの印にデザイン化しました。武将であれば旗印でしょう。いざデザイン化しましたが、彫れる技量のある方を探すのに悪戦苦闘しました。最後は

Instagramで検索し、吟味の末、一級印章彫刻技能士の熊本の荒木桃園にたどり着きました。素晴らしい技術で魂の雅印を彫って頂いた印を使用しました。

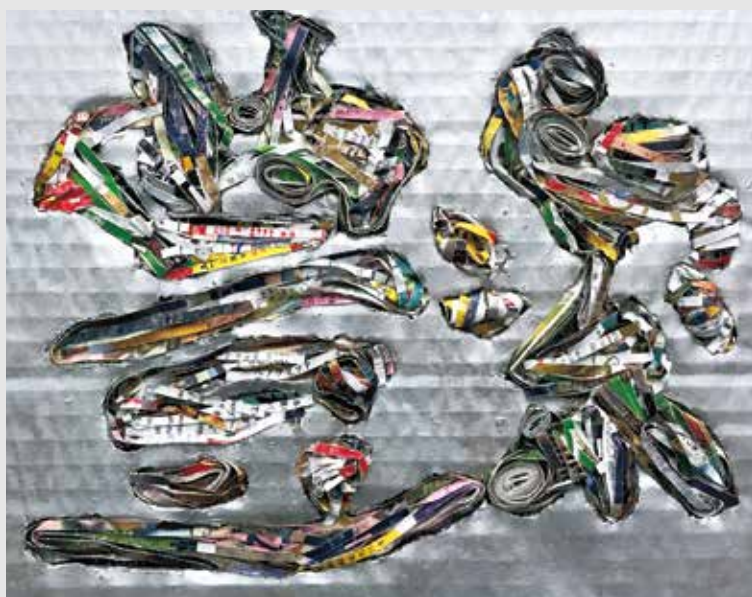


「DIGITAL×ANALOG」

今回の作品は、年始ということもあり、お祝いの言葉を作品にしました。書道は書いて終わりという簡単な工程ですが、今回は書いて、彫って、現代の印刷物を材料に文字を立体的にして、着色して、作品制作しました。つまり、制作工程を増やして、味わい深くすることに挑戦しました。この制作スタイルを追求していきたいと思います。



「DIGITAL×ANALOG 福寿 / 2018」



「DIGITAL×ANALOG 豊楽 / 2018」



「心象画 01 / 2018」



「心象画 02 / 2018」

宝船展に 謎の男、現わる！！



photo；大杉謙治



展示作品と交わりながら進む



photo；中村元



時に転び



ヴァイオリン奏者
新村隆慶



時に触れ

ふたり 対峙する すると・・・



photo；大杉謙治

宝船展



琵琶奏者；新村康子



音と体が響き合い
作品に光が差し込む。
すると絵画的空間へと
変貌を遂げる——！

天人



photo；中村元

仮面をはずして



植物の精になって



photo；大杉謙治

飛び立つ！



SMF 宝船展 2018 来場者投票・コメント 集計

- 第1位 (8票) No.32 三友周太《トレインミュージアム (100色100語)》奥から見たカラー配色がきれいなので…。／三友さんの作品らしくなかったから／動きが美しい、止まっているのに—／きれい／奥側から見たときのキューブの色に驚いたので。／グラデーションの美しさ、並べる労力・根気
- 第2位 (7票) No.1 浅見俊哉《現在の青図》ひきつけられた／いつもFBを見てます。広島での作品は素晴らしいです。今回のは、それをもっと発展させ、可能性を広げてます。応援します／強度やエネルギーがある。／本箱 写真私は良いと思った／パフォーマンスを見ることができました。感想をうまく書けないのですが気持ちを動かされました。何度も思い出す作品になると感じました。／体のしなやかさに見入ってしまいました。／体のしなやかさがすごい
- 第3位 (6票) No.4 加藤こどもの造形教室 (25人合作)《名前立国》いろんな国があり楽しいから／子ども達の思いが形になって、うったえかけられました／ゆめの国だからいいと思いました。／なんとなく
- 第3位 (6票) No.36 矢花俊樹《旅に誘う虫たち》お見事!! 職人技!!／細くて、ほんとに動きそうだから。／生きているようでした。／細かくリアルですごい／リアルできれいでした。
- 第5位 (4票) No.31 三木祥子《Indistinguishable Boat, 2018》震災で被災したとき、ネット環境、電波環境にないとき、新聞が貴重な情報源だったという。ニュースは魚のように尾鰭、背鰭が付き、大きな海に流れていく。しっかりした船で善い魚を捕まえていきたい／福島のこと、とても大切なことだと思いました。／心に響きました!!／コンセプトがストレートなのがいい。SMFの展示は、全体に、言葉いじりが過ぎる印象が強く、コンセプトいじりで終わっている作品が目立つ。作品そのものは力があっても、イデオロギーの説明が前面に出てしまい、視覚表現なのか思想運動の宣伝なのか分からなくなってしまうケースもあった。三木さんの作品は、試作的印象もあり、同じコンセプトで更に存在感が高まる発展性を感じた。
- 第5位 (4票) No.21・22 西尾路子《solid@plane : // 22 猫・描 2017》《solid@plane : // 23 犬・犬 / miniature model / 2018》猫 描→アートです。いい作品で楽しい!／家に欲しい／すわってみたい!!／パフォーマンス+作品=芸術 いつもありがとう。
- 第7位 (3票) No.12 谷川潤《たにじゅん日記～the diary of TANIJUN～》町のいろいろなお店がえがかれせつ明や人気商品がのってるので行きたくなりました。／丁寧な作品作りが良い。製本されたもの楽しみです。色使いが好き。／絵がとても素敵だったので。
- 第7位 (3票) No.16 とうゆう《だい》「だい」というシンプルな題名から、興味を抱き、ワクワクしながら楽しめた。色がきれいだった。／だいがこんなに続くなんて。
- 第7位 (3票) No.35 矢花俊樹《84 children》みなが楽しくなる／子どもの学年の作品
- (2票) No.6 木村昭司《風景 Collection》透明な風景感じる、私もスケッチ大好きです
No.11 田中清隆《方法装置》アイデアがおもしろい。光と景がいいです。光と影の面白さ、影のゆらぎ
No.13 DamaDamTal《クウのキオク》ダンスパフォーマンスは何度か道すがらに見た事があったのですが、ゆっくり落ち着いて見て、凄いいと思いました。作品をダンスや心で表現する新しい方法のような気がしました。伝わり方もさまざまで、素晴らしかったです。／場所性を活かしたパフォーマンスが、非常に面白かった。
No.14 チームパワーワード《Circlight Communication》柔らかい白いドレスとLEDの対比が良いですね。惜しむらくはムービーが見づらいのと点灯する様子が現場で見られないことでしょうか。／一番印象にのこっていて、すてきだったから
No.20 中村隆《今年の干支は、きたうらワン!》かわいい
No.34 みやうか《星に願いを》形のバランスと光のコラボが美しい
- (1票) No. 8 佐藤仁美《SENSE OF FIELD》幾何→自然→合体 楽しみです
No.10 清水和乃《浮島》(コメントなし)
No.18 戸口未貴《(タイトル未定) 2018年の挑戦と希望のストーリー》未来と希望を感じました。
No.29 星野佑太《個：うつわに宿る Unique》細やかな作品が無造作に置かれていたのが何ともこれから楽しみです。
No.33 みやうか《夢見る樹》(コメントなし)
No.37 社会芸術/ユニット・ウルス《“野良の藝術” 里山の現場 2017 活動報告展》炭の臭いがなつかしい。ファーム・インの風景を思い出す
No.38 横田龍堂《DIGITAL x ANALOG》(コメントなし)
(会場全般) 心が広がってゆく 夢のある世界でした

ご投票ご協力ありがとうございました!

「まえがき」を担当された青山恭之さん同様、ぼくも建築の設計を生業としている。

みんなが建物をすばらしい作品としてつくれば、おのずからすばらしい街なみが現れてくるはずだ、若い頃は単純にそう考えていた。しかし必ずしも、というよりも、必ずそうっていないのは、「まえがき」の「場所と表現をめぐる旅」で青山さんが指摘された「場所」の課題に踏み込めていないからだろうか。だが、そうした束縛からはなれたところでアートは輝いているような気がする（おそらく青山さんも同じように思っているのではないだろうか）。

庭を含み敷地までのデザインが建築で、その中に建つ家具のような器を建物と呼ぶ。僕はそう思っている。だから建築は、場所や時代のしがらみからアートにはなり得ず、技術の範疇にとどまってしまう。それはそれでいいと思うが、技術の額縁の中で収める建物のように思いを込めていけば、あるいは建築家でもアーティストの仲間入りできる手がかりをつかめるのかもしれない。あの堀口捨己だって、都市にある様々なしがらみから離れてこそ純粋な建築をつくることができると紫烟荘をつくった感想を（「建築の非都市的なものについて」『紫烟荘圖集』）で記している。

画家が別所沼で額縁を購入するように、無責任と誹られようと、気心の知れた庭師に額縁づくりをまかせられれば建物づくりに専念ができて、もしかしたら僕でもアーティストになれるかも知れない。

ではどんな建物に思いを込めたいのか。それはやっぱり色気のある建物だろう。宝船展が終わってから、隣に展示した佐藤仁美さんと意見が一致した（と思っている）。彼女もはじめは武蔵美の建築で学んでいて、青山さんの後輩である。で、「あとがき」が「まえがき」を話の種にイジっていてどうするんだ、とつつこみが入ったところでこの話は終わりにしよう、これからのディベートは「アート長屋」の中にある井戸端に場を移して行えばよい。



いずれこの記録集も「アート長屋」に収蔵される。「アート長屋」はぼくたち SMF が運営するアンデバンダン展である。アートに関心をもつ誰もが、ネット上の長屋に敷金家賃なしで部屋を借り、そこで自分の作品や夢を表現することができる。この長屋には隣接して「アート物置」と呼ばれる蔵が建ち、そこには書架もあり、この記録集をはじめ様々な作品、報告がしまわれたアーカイブズでもある。長屋には井戸もあり道行く人も入居者たちもそこに集い、住戸の作品や蔵の中から話の種を引っ張り出して井戸端談義に花を咲かせる。そんなヴァーチャルコミュニティを目論んで発足した「アート井戸端」だが、まだ十分に活用されているとはいいがたい。

「アート長屋」を建設するはるか前、SMF が発足した翌年から始まったのが「ラウンドテーブル」である。年に一度、アートを表現する側ばかりではなく、企画する側、楽しむ側、様々な立場からアートに惹かれた個人や団体が、車座になり、あるいは円卓を囲み（囲むのが炬燵だったこともあったが）、^{face to face} 相対で、作品を語り、夢を語り、思いを語り合うひとときを持つ。

「宝船展」はこの「ラウンドテーブル」と「アート長屋」を両親として産まれたインスタレーションである。「アート長屋」がいまだ成功にほど遠く「アート井戸端」も失敗寸前のところを彷徨^{さまよ}っていて、これからの成功を願うとすればこちらが母親になるのだろう。



さて肝心の「宝船展 2018 @ MOMAS」。この企画展は 3 回目を迎えたが、これまではネット上の「宝船展 on the net」を経て、埼玉県立近代美術館内で現実の「宝船展 @ MOMAS」へと続いたのだが、今回は諸般の事情から前者を省略し、後者のみで勝負した。にも拘わらず前回を上回る出展者が集まったことは嬉しい予想外れだった。

そして感想をもうひとつ。入場してほどなく、三友周太さんが精魂込めて並べた大量のキューブ、整然としながら僅かにゆらいで色気を醸し出す配列の群れに、サッカーボールを蹴り込みたくなる衝動を会期期間の 5 日間、我慢し続け、そしてそれを誰かやらないかなと期待し続けていたのはぼくだけだったろうか。



「あとがき」を任されながら、相も変わらず、とりとめのない徒話になってしまいました。次のページに、ぼくたち SMF の履歴書を掲載し「あとがき」に代えることでお許しをいただき、そして、この誌面を借りて、出展者の方々、鑑賞に来て下さったの方々、そして一緒に主催をして下さった埼玉県立近代美術館のご厚意に、SMF 一同、厚く御礼申し上げる次第です。

■ 幼年期 (PRE SMF 時代)

- 2002 年 ヒアシンスハウスをつくる会、発足
- 2004 年 ヒアシンスハウス竣工
- 2006 年 さいたまアート懇話会
- 2007 年 さいたまアートフォーラム研究会

■ 少年期

- 2008 年度 SMF 発足
平成 20 年度 文化庁「芸術拠点形成事業」(ミュージアムタウン構想の推進)
LINK! ミュージアムからアートの風を!! 「風の記憶」…… アート電巻フェスタ 2008
- 2009 年度 平成 21 年度 文化庁「美術館・博物館活動基盤整備事業」
SMF アートのわっ! 「風の行方」…… あつまれアートのつむじ風 2009
- 2010 年度 平成 22 年度 文化庁「美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業」
交差する風 織りなす場「風の軌跡」…… SMF アート楽座・アートバンク 2010
- 2011 年度 平成 23 年度 文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業(ミュージアム活性化支援事業)
Saitama Art Platform 形成準備事業「つながる Heart Art」
- 2012 年度 平成 24 年度 文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業(ミュージアム活性化支援事業)
Saitama Art Platform 形成準備事業「ひろがる」

■ 青年期

- 2013 年度 SMF の組織化
(会則の作成、会員の会費による運営、フォーラムの開催とフォーラムの決議による運営)
- 2014 年度 平成 26 年度 地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業
あなたとどこでもアート「小さな家プロジェクト」(衣・食・住をテーマにした 3 年計画の初年「住」)
「アート長屋」建設
「アートのまつり」開催
- 2015 年度 平成 27 年度 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業
あなたとどこでもアート「着がわりプロジェクト」(衣・食・住をテーマにした 3 年計画の 2 年目「衣」)
「アート長屋」入居開始
「宝船展 I」開催
- 2016 年度 平成 28 年度 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業
あなたとどこでもアート「おかわりプロジェクト」(衣・食・住をテーマにした 3 年計画の最終年「食」)
「宝船展 II」開催
さいたまトリエンナーレ 2016 に参加
「SMF 学校」運営

■ 成年期

- 2017 年度 組織化された SMF の自立した活動の初年
「宝船展 2018 @ MOMAS」開催